

山階鳥類研究所 年報

令和6(2024)年度

Annual Report
of the
Yamashina Institute for Ornithology
2024

公益財団法人 山階鳥類研究所

令和7(2025)年8月

はじめに

公益財団法人山階鳥類研究所（以下、本研究所）の令和6年度の年報を刊行します。この年報は、本研究所の研究員、専門員が令和6年度に行った研究、調査、社会活動等についてまとめたものです。

本研究所の活動は多岐にわたっており、研究所が収集した標本・資料の管理と拡充、鳥類標識調査や希少鳥類の調査・保全活動などの野外活動、鳥類のさまざまな試料について、DNAの解析、電子顕微鏡画像、X線CT画像やマルチスペクトル画像を用いた形態データの作成、安定同位体を用いた食性解析などがあります。得られた標本・資料、データは研究所の所員だけでなく、外部の研究者の研究にも活用されております。さらに、所員は各自の専門性を活かしたさまざまな活動を行っております。

本研究所の活動は、文部科学省、環境省、諸財団、自治体、企業などからの研究助成や業務委託に支えられております。したがって、この年報は、外部の関係者の方々にも読んでいただき、評価いただくことで本研究所の活動を改善することが目的の一つです。

本年度は節目となる二つの活動がありました。一つは、わが国の鳥類標識調査が100周年をむかえたことで、この調査を60年以上にわたり受託している本研究所は、日本鳥類標識協会と共催で記念シンポジウムを開催いたしました。もう一つは、文部科学省科学研究費補助金特定奨励費による事業、「鳥の学問に関する資料・知識・技術を次世代に伝えるための研究事業」が採択され、本年度から新フェーズが始まりました。この事業ではこれまでどおり標本・資料の更なる拡充と適切な管理のもと、幅広い学問領域の研究者や、市井のこれらの分野に関心をもつ人々の利用に供することのできるように公開していくことなど、事業の基盤となる事項に加え、当研究所がこれまで培ってきた、鳥の学問に関する資料、知識、技術等をいかに次世代に伝えるのか、主に広報と人材育成について焦点をあてて進めております。これらの活動や研究の内容は、自然科学領域だけでなく社会科学領域にも及んでおり、本研究所に蓄積された標本・資料およびさまざまな知識や技能・技術は、他機関との連携・人材育成にも活用されていきます。

以上のような本研究所の多様な活動の記録を継続して残すことは、活動の長期的な評価と将来計画に役立つものと考えます。また、活動成果を公表し、広くご意見や評価をいただくことは、公益財団法人である本研究所の責務であります。本研究所の1年間の活動をふりかえり今後の活動の改善や本研究所の将来を考える機会にしていきたいと思っておりますので、多くの皆様にご一読いただき忌憚のないご意見を頂戴できれば幸いです。

最後に、年報の作成、編集に尽力いただいた皆様にお礼申し上げます。

令和7年8月
山階鳥類研究所所長
小川 博

目 次

I おもなできごと	1
II トピックス	5
● 今年度から「鳥の学問に関する資料・知識・技術を次世代に伝えるための研究事業」が始 まります	6
● 第23回山階芳麿賞を内藤靖彦 博士に贈呈しました	6
● 小笠原諸島鴎島のアホウドリ、初めて1シーズンで3羽が誕生	7
● サントリー世界愛鳥基金から絶滅危惧種アホウドリの保全のための利用海域調査に助成	8
● 「山階芳麿博士の作った図鑑」－『日本の鳥類と其の生態』ができるまで－	9
● 日本鳥学会と共催で「鳥の学校」標本製作講習会を開催しました	10
● 鳥類標識調査100周年記念公開シンポジウム	10
● アホウドリの長寿記録が更新され、42歳7か月となりました	11
● 伊豆諸島鳥島からライブ配信を行いました	12
III 事業内容	13
III-1 事業報告 要約	14
III-2 事業報告 事業別概要	16
III-3 旧保全研究室の事業活動	29
III-4 令和6年度科学研究費助成事業（特定奨励費）状況報告書	31
III-5 研究所員の論文・講演等活動成果	48
III-6 所蔵資料の利用実績	54
III-7 新聞・雑誌・メディア記事掲載記録	55
IV 令和6年度決算資料	57
IV-1 貸借対照表	58
IV-2 正味財産増減計算書	60
IV-3 財産目録	62
V 資料編	65
V-1 組織図	66
V-2 人員構成	67
V-3 評議員名簿	68
V-4 役員名簿	69
V-5 特任研究員・特任専門員・客員研究員・フェロー 名簿	70

|

おもなできごと

【令和6（2024）年】

- 1月～ バードウォッチング雑誌「Birder」にて、「標す・識る・調べる・查べる～足環とともに100年」を企画・連載（現在連載継続中）
- 3月16日～5月6日
北九州市立自然史・歴史博物館（いのちのたび博物館）春の特別展「カラーズ～自然の色のふしぎ展～」に展示協力（福岡県北九州市）
- 4月20日～（2025年3月15日）
「鳥のサイエンストーク」を、毎月第3土曜日（9・11月を除いた10回）にオンラインで開催（共催：我孫子市鳥の博物館）
- 5月20日 防災・消火訓練を実施
- 5月22日 定時理事会（書面決議）
- 6月7日 「第23回山階芳麿賞を内藤靖彦氏（国立極地研究所名誉教授）に贈呈することを決定」・「第23回山階芳麿賞記念シンポジウムを9/21（土）東京大学弥生講堂で開催」報道発表
- 6月9日～12日
岩見研究員が、「自然史資料を未来につなぐネットワーク九州」の活動として、熊本博物館において標本制作講習会を実施（熊本県熊本市）
- 6月11日 「小笠原諸島鴛鴦島のアホウドリ、今シーズンの繁殖期（2023-24）は、鴛鴦島でこれまでで最多となる3羽のひなの誕生が確認されました」報道発表
- 6月16日 油田研究員、東京都野鳥公園での世界アルバトロスデー&シーバードウィークイベントで「アホウドリ保全の最前線ー現在の状況と課題ー」と題して講演（東京都大田区、オンライン併用）
- 6月25日 令和6年度定時評議員会・臨時理事会（霞会館）
- 7月2日 小笠原村議会議員9名が視察で山階鳥研を来所
- 7月5日 JAC環境動物保護財団の田崎理事長と宮原事務局長が来所
- 7月6日 仲村研究員が、芝浦工業大学柏中学校で「手賀沼の生態系、そして手賀沼の鳥類について」と題して講演（千葉県柏市）
- 7月12日 「山階鳥類研究所の我孫子市移転40周年を記念した企画展「山階芳麿博士の作った図鑑ー『日本の鳥類と其の生態』ができるまでーが開催されます」報道発表
- 7月13日～11月4日
企画展「山階芳麿博士の作った図鑑」ー『日本の鳥類と其の生態』ができるまでー」を、我孫子市鳥の博物館で開催（千葉県我孫子市）
- 7月22日 山階芳麿賞贈呈式をグランドハイアット東京にて開催（東京都港区）
- 7月22日 東日本・中部日本地区賛助会員の集いを開催
- 7月22日 鳥類標本60種85点をご寄贈いただいた鳥取県在住の清末忠人氏、個人標本コレクションをご寄贈いただいた新潟県在住の風間辰夫氏、三重県在住の橋本理市氏にそれぞれ感謝状を贈呈
- 7月31日 浅井研究員・平岡専門員が、静岡県立掛川西高等学校の2年生より、「総合的な探求の時間」で設定した「ムクドリのおぐらについて」というテーマでの取材に対応（オンライン）
- 8月2日 兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科の出口智広准教授と研究室所属の大学院生3名が来所し、コウノトリをテーマにゼミを実施
- 8月4日 尾崎副所長が、京都市動物園で「山階鳥類研究所との連携記念講演会&動物園DEサイエンストーク」イベントとして「ヤンバルクイナの野生復帰作戦」と題して講演（京都府京都市）
- 8月8日 私立光明学園相模原高等学校から14名が理科教員対象研修会として山階鳥研を来所
- 8月19～23日、9月12・17～20日
立教大学・日本獣医生命科学大学（8月）、酪農学園大学・帯広畜産大学（9月）それぞれ1名、計4名を博物館実習生として受け入れ
- 8月27日 スミソニアン国立自然史博物館の鳥類部門コレクションマネージャー、クリストファー・ミレンスキー氏が来所し所内を見学
- 8月31日・10月6日
我孫子市鳥の博物館の企画展「山階芳麿博士の作った図鑑ー『日本の鳥類と其の生態』ができるまでー」（共催：山階鳥研）で、鶴見文化資料ディレクターと小林研究員が展示資料

- についてギャラリートークを実施（千葉県我孫子市）
- 9月4日 臨時理事会（書面決議）
- 9月5・6日 流山市立八木中学校より、中学2年生2名を2日間の職場体験学習のために受け入れ
- 9月10日 アメリカ自然史博物館の鳥類部門コレクションマネジャー、ポール・スイート氏が来所し所内を見学
- 9月17日 日本鳥学会と山階鳥研共催で、「鳥の学校 テーマ別講習会」において、岩見研究員が標本製作講習会を実施（千葉県我孫子市）
- 9月21日 第23回山階芳麿賞記念シンポジウムを、東京大学弥生講堂で開催（東京都文京区）
- 9月28日 朝日新聞週末別刷り「be」の連載記事「はじまりを歩く」で、鳥類標識調査について取材紹介
- 9月28・29日、10月5・6日 澤研究員が、日本科学未来館のARTBAY TOKYOアートフェスティバル2024「DAMBOキッズ鳥学会〜渡り鳥を通して環境問題とアートを学ぶ〜」を担当（東京都港区）
- 10月1日〜11月1日 谷津干潟自然観察センターで開催された、野生動物写真家、中村恵美さんの写真展「eternally〜消えかけていた翼が再び空へ蘇った」において、アホウドリのデコイとヒナの輸送箱を貸し出して協力（千葉県習志野市）
- 10月5日 尾崎副所長が、名護博物館で公開シンポジウム「ヤンバルクイナおかえり名護市へ！ー世界自然遺産を未来へつなぐ」（主催：山階鳥研、共催：名護市教育委員会）で「ヤンバルクイナってどんな鳥？ 発見から最新の調査でわかってきたこと」と題し基調講演を実施（沖縄県名護市）
- 10月7日 平岡専門員が、奈良まほろば館において、奈良シニア大学in東京主催の講演会「正倉院宝物バードウォッチング」と題して講演（東京都港区）
- 10月11日 文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）意見交換会（オンライン）
- 10月14日 世界で地球環境の保全に多大な貢献をされた方々の功績をたたえ、永く後世に伝えるために2010年に創設された「KYOTO地球環境の殿堂」において、第15回殿堂入り者として、山岸哲名誉顧問を表彰
- 10月18日〜（2025年3月29日） 東京農業大学「食と農」の博物館企画展「南極飯！」に昭和天皇への献上品となったコウテイペンギンの剥製を貸出（東京都世田谷区）
- 10月25〜30日 東京都美術館で開催された第25回全日本バードカービングコンクール（主催：日本バードカービング協会）において、水上清一さんのハシブトガラスを扱った作品「祈り'24（松田道生氏に捧ぐ）」に山階鳥類研究所所長賞を贈呈（東京都台東区）
- 11月1日 鳥類標識調査100周年を記念して標識調査を広く一般に紹介することを目的とした書籍『足環をつけた鳥が教えてくれること』を山と溪谷社より出版
- 11月2・3日 ジャパン・バード・フェスティバル2024（JBF2024）（実行委員長：小川所長）で、「山階鳥研 見にレクチャー」として2日間にわたり所員10名によるミニ講演会を実施。また、我孫子市鳥の博物館と共催で「鳥学講座」を2日に開催（千葉県我孫子市）
- 11月11日 臨時理事会（書面決議）
- 11月12日 「鳥類標識調査100周年記念公開シンポジウムを開催します」報道発表
- 11月21日 小林研究員が、毎日新聞企業人大学の定期講座で「背景を知るとおもしろい標本の話」と題して講演（千葉県千葉市）
- 11月22日 鳥類標識調査100周年記念公開シンポジウム「足環をつけた鳥が教えてくれることー鳥類標識調査のこれまでとこれからー」の講演のために来日したオルデンブルク大学のウィーランド・ハイム博士が来所
- 11月23日 鳥類標識調査100周年記念公開シンポジウム（主催：日本鳥類標識協会・山階鳥研）「足環をつけた鳥が教えてくれることー鳥類標識調査のこれまでとこれからー」を東京農業大学世田谷キャンパス農大アカデミアセンター横井講堂で開催（東京都世田谷区）

- 11月25日 「山階鳥学セミナー（発信器装着実習編）」を山階鳥研で実施
- 11月30日 尾崎副所長が、足立区生涯学習センター・山階鳥研連携講座で「絶滅危惧種ヤンバルクイナの未来」と題して講演（東京都足立区）
- 11月30日・12月1日
「山階鳥学セミナー（捕獲技術入門編）」を京都市動物園・京都大学フィールド科学研究センター（12月1日）で実施
- 12月3・4日
流山市常盤松中学校より、中学2年生2名を2日間の職場体験学習のために受け入れ
- 12月5日 NHK総合「サラメシ」が、新潟県の福島潟ステーションで行われていた鳥類標識調査中の仲村研究員の昼食風景を鳥研究者の「まかない飯」として取材紹介
- 12月8・9日
鳥類標識調査講習会の講義を山階鳥研で実施
- 12月19日 浅尾慶一郎環境大臣を表敬訪問（壬生理事長、小川所長、尾崎副所長、水田自然誌・保全研究ディレクター、棚橋事務局長）
- 12月20日 岩見研究員と富田研究員が、朝日カルチャーセンター新宿教室で「研究者が語る鳥類学」と題して講義（東京都新宿区）
- 12月22日 岩見研究員が、相模原市立博物館において、標本製作技術講習会を実施（神奈川県相模原市）

【令和7（2025）年】

- 1月21日 鳥類標識調査のニュースレター「バンディングかわら版」第9号発行
- 1月23日 「アホウドリの長寿記録が更新され、42年7か月となりました」報道発表
- 1月26日 （一社）日本鳩レース協会の2024年度総合表彰式において、小川所長からレース鳩帰還率賞を贈呈（東京都台東区）
- 2月7日 文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）研究成果発表会を、東京大学農学部フードサイエンス棟中島董一郎記念ホールにて実施（オンライン併用）
- 2月18日～3月5日
伊豆諸島鳥島において、アホウドリやクロアシアホウドリのコロニー前からライブ配信を2回実施
- 2月20日 「日本で100年間蓄積されてきた「鳥類標識調査データ」が、国際的な研究舞台でその利用性や重要性が見過ごされていることを明らかにし、減りゆくアジアの渡り鳥の保全には、データの有効活用がカギになりうることを見出した」（森林研究・整備機構 森林総合研究所との共同で報道発表）
- 3月1日 水田ディレクターが、江戸川大学国立公園研究所主催の2024年度国立公園フォーラム「生物多様性保全と保護地域～ネイチャーポジティブに向けた連携を考える」において、「なぜ守るのか：奄美大島における希少種保全の取り組み」と題して講演（千葉県流山市）
- 3月10日 尾崎副所長が、株式会社ヤクルト本社の情報誌「ヘルシスト」290号の特集「謎多き渡り鳥」で記事を掲載
- 3月19日 定時理事会（オンライン）
- 3月21日 鳥類標識調査のニュースレター「バンディングかわら版」第10号発行
- 3月26日 山階鳥研が、日本アルミニウム協会の広報誌「アルミエージ」No. 201のアルミ製足環の記事作成に協力
- 3月31日 水田ディレクターが、沖縄クリスチャンスクールインターナショナルの学生より卒業プロジェクトの一環で日本全国の鳥類保護活動についてのオンライン・インタビューに対応

上記のほか、所内見学会を原則毎月第4金曜日、午前と午後の2回実施

II

トピックス

令和6年度にあったできごとから、トピックを広報誌「山階鳥研NEWS」から抜粋・編集し、英訳をつけて紹介します（役職名・所属名等は、いずれも「山階鳥研NEWS」掲載当時のものです）。

The following are excerpts from “Yamashina Choken NEWS” and edited topics from events that occurred in FY2024 (all titles and affiliations etc. are current at the time of publication).

● 今年度から「鳥の学問に関する資料・知識・技術を次世代に伝えるための研究事業」が始まります

山階鳥研は、文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）を受けた令和6年度から3カ年の事業で、所蔵の貴重な資料群について収集・管理・公開を継続します。また、これらの存在と意義の認知度をさらに高めるとともに、学術的人材を育成するため、これまでの事業内容を次世代に伝える基盤の整備も行います。

標本、組織サンプル、DNAバーコードデータ、安定同位体比データ、図書および鳥学資料を収集し、デジタル化や管理をすることで、利用を希望する研究者をサポートします。所蔵資料の各種データは、ウェブやデータベースを通じて公開します。学術雑誌『山階鳥類学雑誌』を年2回刊行します。世界の鳥類の和名について、最新の分類体系に合わせた改訂作業を行い、提唱します。人材育成として、野外で野鳥を安全に捕獲し取り扱う技術や、解剖、剥製作製の技術を映像記録として収集するとともに、実習や講習会を開いて基礎知識の場を提供していきます。

これらの計画は、文部科学省に認められ、令和6年度から令和8年度まで執行されます。

（山階鳥研NEWS 2024年5月号より）

“The research project for passing on materials, knowledges, and techniques relating study of birds to next generation” is underway beginning this 2024.

The Yamashina Institute for Ornithology (YIO) will continue to collect, manage, and make the valuable materials in its collection open and available to public for scientific use as part of a three-year project beginning in 2024, funded by a Grant-in-Aid for Scientific Research (Grant-in-Aid for Specially Promoted Research) from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, Japan (MEXT). In addition, we will further raise awareness of the availability and significance of these materials, and raise academic professionals in order to develop a foundation to pass on our past projects to the next generation.

The collection of specimens, tissue samples, DNA barcode data, stable isotope ratio data, books, and ornithological materials are collected, digitized, and managed to support researchers who are willing to utilize them. Various data from the collection will be made available through the web and databases. The scientific journal “Journal of the Yamashina Institute for Ornithology” will be published twice a year. The Japanese names for the birds of the world will be revised in accordance with the latest classification systems, and will be advocated. As part of developing professionals in the study of birds, we will collect video records of techniques for safely capturing and handling wild birds in the field, dissecting and taxidermy, and provide opportunities for basic knowledge through practical training and workshops.

These plans were approved by the MEXT and will be implemented from fiscal year 2024 to 2026.

(Excerpt from the May 2024 issue of Yamashina Choken News)

● 第23回山階芳麿賞を内藤靖彦博士に贈呈しました

第23回山階芳麿賞を内藤靖彦博士(国立極地研究所名誉教授)に贈呈しました。贈呈式は、7月22日(月)に開催される山階鳥研の「東日本・中部日本地区賛助会員の集い」にあわせて開催しました。

山階芳麿賞の贈呈は、わが国の鳥学および鳥類保護に顕著な功績のあった方（団体を含む）を対象に、1992(平成4)年から実施しています。内藤靖彦博士は、世界に先駆けてバイオロギング研究を立ち上げ、鳥類その他の動物に関する新しい研究手法の展開に大きな貢献をされるとともに、若い研究者の育成にも尽力されました。これらの功績が、山階芳麿賞選考委員会（小川博委員長）により山階芳麿賞にふさわしいものと評価されました。

記念シンポジウムは、9月21日（土）に東京大学弥生講堂（東京都文京区）で「超小型の記録計で動

物の生活を探る～バイオリギングの歩みと動物研究」と題して開催され、受賞した内藤靖彦博士と、佐藤克文東京大学教授、高橋晃周国立極地研究所教授が講演し、来場者からの質疑応答に対応しました。

(山階鳥研NEWS 2024年7月号・9月号・11月号より)

The 23rd Yamashina Yoshimaro Award was presented to Dr. Yasuhiko Naito.

The 23rd Yamashina Yoshimaro Award was presented to Dr. Yasuhiko Naito, Professor Emeritus of the National Institute of Polar Research. The presentation ceremony was held in conjunction with the Yamashina Institute's East and Central Japan Regional Supporting Members Meeting held on Monday, July 22.

The Yamashina Yoshimaro Award has been presented since 1992 to individuals (including organizations) who have made outstanding contributions to ornithology and bird conservation in Japan. Dr. Yasuhiko Naito pioneered biologging research and made significant contributions to the development of new research methods for birds and other animals, and also devoted himself to the training of young researchers. These achievements were highly evaluated by the Yamashina Yoshimaro Award Selection Committee (chaired by Hiroshi Ogawa) as worthy of the Yamashina Yoshimaro Award. The commemorative symposium was held on Saturday, September 21 at the Yayoi Auditorium of the University of Tokyo (Bunkyo-ku, Tokyo) under the title of “Probing Lives of Animals with a Microminiature Recorder: Progress in Biologging and Animal Research” with lectures by Dr. Yasuhiko Naito, along with Professors Katsufumi Sato of the University of Tokyo and Akinori Takahashi of the National Institute of Polar Research.

(Excerpt from the July, September, November 2024 issues of Yamashina Choken News)

● 小笠原諸島鴛島のアホウドリ、初めて1シーズンで3羽が誕生

山階鳥研では、伊豆諸島鳥島（以下、鳥島）と小笠原諸島鴛島（以下、鴛島）で、アホウドリの繁殖状況についてモニタリングを実施しています。鳥島は火山島で繁殖地としては不安定なことから、かつての繁殖地であった鴛島にヒナを移送して人工飼育し、これらの個体をもとに新繁殖地を形成させる事業が2008～2012年に実施されました。最初に移送され巣立った個体が鴛島に戻ってくるようになったのは2011年で、繁殖開始から4年目の2016年に初めて鴛島生まれのヒナが誕生しました。

2022年と2023年は繁殖に成功したペアが2組となり、2024年は3ペア目が卵を孵化させ、初めて1シーズンに3羽のヒナが確認されました。

1シーズンに誕生するヒナの数が増えるということは、鴛島周辺に飛来する別の個体にそこが繁殖適



(上；左) 贈呈されたメダル (上；右) シンポジウム会場に設置された立て看板とポスター (下) シンポジウムでの質疑応答の様子



鴛島で今シーズンに生まれたヒナ（矢印で示した黒い個体がヒナ、左からY84、Y85、Y86）

地であるというアピールになり、ここで営巣するペアの増加につながります。10ペア以上が安定して繁殖するようになれば、繁殖地として自立できると考えられ、鴯島が安定した新繁殖地になるという目標の達成に向かって着実に進んでいると言えるでしょう。

(山階鳥研NEWS 2024年7月号より)

Three chicks of the Short-tailed Albatross hatched in a season for the first time at the new colony in Ogasawara.

The YIO continues monitoring the breeding colonies of the endangered Short-tailed Albatross on Torishima of the Izu Islands and Mukojima of the Ogasawara Islands. Torishima, the original colony is unstable due to the volcanic activity. Therefore, a project was conducted from 2008 to 2012 to establish a new colony on Mukojima, where there used to be a breeding colony, by translocating chicks hatched on Torishima and artificially feeding until fledging. The translocated and fledged birds were observed back on the island since 2011 and started to breed. In 2016 after three unsuccessful attempts to breed, a chick was hatched on the new colony for the first time on Mukojima. In 2022 and 2023, two pairs bred successfully, and in 2024, a third pair has successfully hatched an egg making it three chicks in a season.

The increase in the number of chicks on the new breeding colony will appeal to other individuals visiting Mukojima as a suitable breeding site, ideally leading to an increase in the number of nesting pairs. If more than 10 pairs breed stably over years, the island should be able to stand on its own as a breeding colony which ensures that the project is making steady progress toward achieving its goal to establish a new breeding colony.

(Excerpt from the July 2024 issue of Yamashina Choken News)

● サントリー世界愛鳥基金から絶滅危惧種アホウドリの保全のための利用海域調査に助成

4月22日、東京都千代田区の学士会館で、公益信託サントリー世界愛鳥基金第35回活動助成金贈呈式が行われ、山階鳥研を含む23団体に助成金が贈られました。

これまでの保全活動によりアホウドリの個体数は順調に回復してきています。一方で保全活動や研究の成果から伊豆諸島鳥島と尖閣諸島のアホウドリが分類学的に異なる集団であることが判明し、それぞれの独自性を保つ保全策の検討が急務となっています。

本活動では、衛星追跡型GPSを用いて繁殖期以外にアホウドリが利用する海域の特定と周年の移動を追跡し、両集団がさらされる漁業混獲や海洋汚染など海の脅威について検討します。贈呈式には富田直樹^{すいてん}研究員が出席し、本事業のプレゼンテーションを行い、塚本瑞天^{すいてん}運営委員長から贈呈書が授与されました。

(山階鳥研NEWS 2024年7月号より)



贈呈書を手にする富田研究員

Suntory Fund for Bird Conservation received for the research elucidating ocean areas used by the endangered Short-tailed Albatross

On April 22, the 35th grant presentation ceremony of Suntory Fund for Bird Conservation was held at Gakushi Kaikan in Chiyoda Ward, Tokyo, where grants were presented to 23 organizations including YIO.

As a result of conservation efforts to date, the population of the Short-tailed Albatross has been steadily recovering. On the other hand, conservation activities and researches thus far have revealed that the albatross population mainly breeding on Torishima and the population breeding on Senkaku Islands are taxonomically distinct, and there is an urgent need for consideration of conservation measures to maintain the distinctiveness of the two populations.

For the fund granted, we will use satellite-tracked GPS to identify areas used by albatrosses outside the breeding season and track their movements throughout the year, and examine the threats to both populations at sea, such as fishing bycatch and marine pollution. Researcher Naoki Tomita attended the ceremony, gave a presentation on the

project, and was presented with a certificate of presentation by Steering Committee Chairman Zuiten Tsukamoto.
(Excerpt from the July 2024 issue of Yamashina Choken News)

●「山階芳麿博士の作った図鑑」－『日本の鳥類と其の生態』ができるまで－

山階鳥研が千葉県我孫子市に移転して今年で40年を迎えます。これを記念して、我孫子市鳥の博物館と共催で、企画展「山階芳麿博士の作った図鑑－『日本の鳥類と其の生態』ができるまで－」を開催しています(会期7月13日(土)～11月4日(月・祝))。

企画展は、「山階図鑑」の制作にまつわるさまざまな資料を展示したもので、おもに図鑑に用いられた図に視点を置いていますが、図鑑とはどういうものなのか、「山階図鑑」が出版される前とそれ以降に作られたさまざまな日本の鳥類図鑑の紹介から始まります。そして、鳥が大好きだった山階芳麿を偲ばせる資料として、6歳の誕生日に両親におねだりして買ってもらったオシドリ^{オシドリ}の剥製、鳥類学者山階芳麿の業績や「山階図鑑」の制作に強い影響を与えた本、「山階図鑑」の挿し絵の制作過程を原画・木口木版の版木・摺り見本を用いて展示するとともに、図鑑の挿し絵のほとんどを手掛けた画家小林重三による挿し絵や、図版の原画や山階壽賀子夫人が描いた原画とスケッチ、写真家下村兼史^{けんし}の写真など、図鑑の制作にかかわった人々の紹介へと続きます。また、版画家長島充さんによるセミナーや山階鳥研所員によるギャラリートークも開催されます。

(山階鳥研NEWS 2024年9月号より)



『日本の鳥類と其の生態』



鳥博での展示風景

The illustrated book of Japanese birds produced by Dr. Yoshimaro Yamashina, - the process of making “Birds of Japan and Their Ecology”-

This year marks 40 years since the YIO have moved to Abiko City, Chiba. To commemorate this event, YIO and Abiko City Museum of Birds have co-hosted a special exhibition, [The illustrated book of Japanese birds produced by Dr. Yoshimaro Yamashina, - the process of making “Birds of Japan and Their Ecology”-] (Dates: July 13 – November 4, 2024).

The exhibition, which displayed various materials related to the production of “the Yamashina Illustrated Book,” focuses mainly on the diagrams used for the illustration, and began with an introduction to what an illustrated book is, and the various Japanese bird books produced before and after the publication of the Yamashina Illustrated Book. The exhibition also included a stuffed mandarin duck specimen that Yamashina begged his parents for his sixth birthday, books that strongly influenced Yamashina’s work as an ornithologist and the creation of the Yamashina Illustrated Book, and the process of creating illustrations for the book, using original drawings, woodblocks and prints of the woodblock prints. The exhibition also continued with an introduction to the people involved in the production of the book, including Shigekazu Kobayashi, one of Japan’s leading natural history artists who created most of the illustrations for the book, Yamashina’s wife, Sugako Yamashina and her original drawings and sketches, and Kenji Shimomura, a renowned bird photographer. A seminar by printmaker Mitsuru Nagashima and a gallery talk by a researcher of YIO were held during the exhibition.

(Excerpt from the September 2024 issue of Yamashina Choken News)

● 日本鳥学会と共催で「鳥の学校」標本製作講習会を開催しました

日本鳥学会が年次大会に連続した日程で開催する「鳥の学校 テーマ別講習会」、今年度は『標本製作講習』と題し、岩見恭子研究員を講師として山階鳥研で行われました。

参加者の多くは、全国各地の大学や博物館、自然観察施設などの関係者でした。標本は、大きな博物館だけでなく、各地の博物館や大学などで、地域の生物を集めて保存していくことが重要です。実技講習の前に、標本はその時代の生物相・自然史を反映した貴重な記録であり、過去に遡って集めることはできず、それらを各地の機関で蓄積する意義などについて講義がありました。実技講習では、ウミネコを材料に、受講者1人につき1羽の仮剥製を製作しました。

今回は、1日で全工程を学ぶため、ある程度準備された材料を用いた「3分クッキング」のような進め方が功を奏し、全員が時間内に仮剥製の組み上げまで完成させました。質疑応答では、受講者から各工程での詳細な内容、技術についての質問が飛び交い、学びが多かったことがうかがえました。

(山階鳥研NEWS 2024年11月号より)



参加者のみなさん

Specimen making workshop “Bird School” was held jointly with the Ornithological Society of Japan.

This year’s “Bird School” theme-specific workshop, titled “Specimen making workshop” was held by the Ornithological Society of Japan on consecutive days to the annual conference at the YIO with researcher Yasuko Iwami as a lecturer.

Many of the participants belonged universities, museums, and nature observation facilities throughout the country. It is important to collect and preserve local fauna as specimens not only in large museums, but also for local museums, universities, and institutes. Before the practical training, a lecture was given on how specimens are valuable records reflecting the biota and natural history of the time period, how they cannot be collected retroactively, and the significance of accumulating them at various facilities. In the practical training, each participant made a study skin of the Black-tailed Gull provided.

In order to learn the entire process of specimen making in one day, all materials have been prepared, and all participants learned from the lecturer attentively step-by-step and were able to complete the making of study skins. The participants asked many questions about specific contents and techniques at each process, indicating that they were enthusiastic and learned greatly.

(Excerpt from the November 2024 issue of Yamashina Choken News)

● 鳥類標識調査100周年記念公開シンポジウム

足環をつけた鳥が教えてくれることー鳥類標識調査のこれまでとこれからー

鳥類に足環などの目印をつけて放し、追跡する鳥類標識調査。日本で初めてこの調査が行われたのは今からちょうど100年前のことでした。以来、何度かの中断はあったものの、日本の鳥類標識調査は粛々と実施され続けてきました。この100年間の継続でどんなことがわかってきたのでしょうか？ そして、次の100年に向けてどんな発展が期待できるのでしょうか？ 本シンポジウムでは、国内外の研究者を招いてこの問いに挑みます。山階鳥研は、本催しを、日本鳥類標識協会とともに主催します。

(山階鳥研NEWS 2024年11月号より)

Public symposium commemorating the 100th Year of Bird Banding Survey

What Birds with Rings Teach Us: Past and Future of Bird Banding Survey.

It was exactly 100 years ago, that the first bird banding survey, in which birds are captured, tagged with individually

identifiable markings such as leg rings, released, and tracked, was conducted in Japan. Since then, although there were several interruptions, Japan's bird banding survey have continued to be conducted consistently. What have we learned over the past 100 years of survey? And what developments can we expect for the next 100 years? In this symposium, we have invited researchers from Japan and abroad and challenged these questions. The YIO hosted this event with Japan Bird Banding Association.

(Excerpt from the November 2024 issue of Yamashina Choken News)

● アホウドリの長寿記録が更新され、42歳7か月となりました

伊豆諸島鳥島（以下、鳥島）での継続したアホウドリの鳥類標識調査は、1979年に東邦大学（当時）の長谷川博氏がその年に生まれたすべてのヒナに足環をつけたことから始まり、現在は山階鳥研がこれらの活動や調査を引き継いでいます。そのため1979年以降の鳥島生まれのアホウドリ（2023年末時点で1万1,550羽）にはすべて足環がついており、生まれた年がわかっています。

2024年11月13日から12月2日の鳥島滞在中に行ったアホウドリの卵数カウント調査で、繁殖地の1つである燕崎で抱卵していた個体の足環から、アホウドリの長寿記録が更新されたことが判明しました。記録から、1982年3月24日にヒナのときに足環をつけた個体であることがわかりました。この個体は42歳7か月で、これまでのアホウドリの長寿記録の37歳8か月から4年11か月の記録更新となりました。

今回の個体が無事に成長し、繁殖を行い、その後も長寿記録を更新できるほど生存できているということは、継続した保全活動がいかに大切かを教えてくれています。またそれは、このような長期のデータの蓄積や整備があって初めてわかることです。

野生の鳥は通常死ぬまで繁殖するので、初繁殖の年齢や、1回の繁殖で育てる子の数とともに寿命を知ることは、その種や個体群の生活史や保全管理において重要な情報になります。今回のような長寿記録の更新は、その生物への理解をうながすだけでなく、野生動物の保全管理や人間活動が環境に与える影響の見直しにもつながります。

（山階鳥研NEWS 2025年5月号より）



長寿記録を更新したアホウドリ（撮影：今野怜）

Longevity record for the short-tailed albatross has been updated reaching 42 years and 7 months.

The continued bird banding survey of the Short-tailed Albatross on Torishima of the Izu Islands was first started in 1979 when Dr. Hiroshi Hasegawa of Toho University at the time banded all chicks hatched that year, and the YIO has taken over and continued these activities and surveys. Therefore, all albatrosses hatched since 1979 on Torishima (11,550 individuals as of 2023) have been banded and are able to determined years they hatched.

The albatross egg count survey, conducted during a stay on Torishima from November 13 to December 2, 2024, revealed that the longevity record for the species was updated from observation of a ring of an individual incubating in one of the colonies, Tsubamezaki. From the record, we learned that this individual was banded on March 24, 1982 when it was a chick. This made the individual at the time of observation 42 years and 7 months old, which is 4 years and 11 months older than the previous record of 38 years and 8 months.

The fact that this individual has grown, bred, and has survived long enough to break the longevity record teaches us how important ongoing conservation efforts and monitoring are. Also, these findings can be obtained only through the accumulation and maintenance of the long-term data.

Birds in the wild usually reproduce throughout their lives. Thus, knowing the age of first breeding, the number of chicks raised at a season, and life span would be valuable information for the life history and conservation management of the species and population. Updates of longevity records like this not only promotes understanding of the species, but also leads to a review of conservation management of wildlife and how anthropological activities influence the environment.

(Excerpt from the May 2025 issue of Yamashina Choken News)

● 伊豆諸島鳥島からライブ配信を行いました

春の調査で、鳥島からアホウドリやクロアシアホウドリのコロニー前からライブ配信を行いました。ライブ配信はSNS等で告知を行い、たくさんの人からのアクセスがありました。YouTubeのコメント欄は時間に関係なくにぎわい、日本だけでなく海外からの反応もあり、マンスリーサポーターも増えました。現在はこれらのハイライトをまとめ、再生リストとして公開しています。みなさんのアクセスをお待ちしています。

(山階鳥研NEWS 2025年5月号より)

Live streaming from the albatross colony on Torishima, Izu Islands

During the spring survey of 2025, we conducted a live-streaming from the Short-tailed Albatross and the Black-footed Albatross colonies on Torishima. The live-streaming was announced by SNS, etc., and accessed and viewed by many people. The comment section was busy regardless of the time of day, and there were reactions from overseas also, resulting in an increase in the donation supporters for the albatross conservation. We have compiled the highlights of the videos and put them as playlist. We look forward to your further access and sharing.

(Excerpt from the May 2025 issue of Yamashina Choken News)



ライブ配信のワンシーン

III

事業内容

III-1

事業報告 要約

【公益目的事業】

I 一般会計による事業	研究責任者／担当者
1. アホウドリの人為的コロニー計画に関する研究（継続事業）	富田直樹
2. 皇居調査-吹上御苑を中心とした皇居内鳥類相を明らかにする（継続事業）	岩見恭子、齋藤武馬、小林さやか、浅井芝樹、黒田清子
3. 普及・広報事業 (1) PR誌刊行事業 (2) 講習会事業 (3) 顕彰事業	棚橋伸
4. 山階武彦助成事業	事務局
II 文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）による研究事業	研究責任者
「鳥の学問に関する資料・知識・技術を次世代に伝えるための研究事業」	
(0) 総括班	小川博
(1) 収集管理班	鶴見みや古
(2) 公開班	浅井芝樹
(3) 人材育成班	水田拓
III 科学研究費補助金（除 特定奨励費）による研究事業	研究代表者／分担者
1. 失われた標本の価値を回復する研究—山階芳麿コレクション	代表者 小林さやか
2. 希少種カリガネの越冬生態が個体群動態に及ぼす影響に関する研究	代表者 澤祐介
3. 適応放散のメカニズムを解明する—分散力の進化的変化に注目して	代表者 山崎剛史
4. 隠蔽種を含む特別天然記念物アホウドリの生殖隔離に関連する行動学的研究	研究者 富田直樹
5. 構造色特有の発色機構が進化させる信号進化：色素とは異なる発現特性と機能の解明	代表者 森本元
6. 鳥類標本の羽から探る生態と種分化（岡山理科大学 准教授 武山智博）	分担者 岩見恭子、富田直樹、水田拓
7. 鳥類における化学防御の時空間ダイナミクスとその進化の解明（大阪公立大学 准教授 吉川徹朗）	分担者 岩見恭子、齋藤武馬
8. ロボット工学が飛行の起源の謎を解く—鳥類を用いた実証研究（千葉大学 准教授 中田敏是）	分担者 山崎剛史
9. 足元にある未知生態系：コケ類の生態系機能と適応進化を動物との相互作用から読み解く（愛媛大学 助教 今田弓女）	分担者 森本元
10. 人工物により支えられる都市の鳥類多様性：日本独自の多様性維持機構（北海道教育大学 教授 三上修）	分担者 森本元
IV 農林水産省による事業	責任者
1. 国際水産資源動態等調査解析補助事業（まぐろ・かつおユニット）「日本周辺で繁殖するアホウドリ類の分布回遊経路の解明」	富田直樹

V 民間助成金による事業	責任者
1. 公益信託サントリー世界愛鳥基金 活動助成「絶滅危惧種アホウドリの保全に資する利用海域の特定」	富田直樹
2. JAC環境動物保護財団 助成金「ヤンバルクイナ保全のための生態研究と啓発」	尾崎清明
3. キャノン研究助成 新産業を生む科学技術「鳥類学と航空工学の協同による飛翔の新たな理解と応用」	岩見恭子、富田直樹
4. 韓国環境生態研究所「鳥インフルエンザ感染経路解明のための渡り性水鳥追跡」	澤祐介
5. State of the Birds Award (U.S. Fish and Wildlife Service) 「Short-tailed Albatross Attraction, Monitoring, and Management」	水田拓、富田直樹
6. Alaska Ecological Services Conservation and Recovery Award (U.S. Fish and Wildlife Service)	水田拓、富田直樹
7. プロ・ナトゥーラ・ファンズ助成「日本の鳥類標識調査の100年－次の100年間の発展に向けたシンポジウム」	水田拓
VI 受託・請負事業	総括責任者
1. 受託事業（国、地方自治体から）計2件 2. 請負事業（国、公営の研究機関から）計7件、合計9件	水田拓
VII その他	

【収益事業】

I 不動産賃貸事業（東京都渋谷区南平台に所有するマンション3室の賃貸）	
-------------------------------------	--

III-2

事業報告 事業別概要

【公益目的事業】

I. 一般会計による事業

1. アホウドリの保全に関する研究（継続）

責任者：富田直樹（研究員）

事業費：150千円

伊豆諸島鳥島の繁殖地や繁殖期以外の利用海域に飛来するアホウドリにアルゴスGPS発信機を装着して周年の分布や移動経路を解明するための発信機の通信料を支出した。他に科学研究費補助金、サントリー世界愛鳥基金、国際水産資源動態等調査解析事業等で、伊豆諸島鳥島において、令和7（2025）年2月から3月にかけて22日間のアホウドリ新コロニー調査を行った。定点観察の結果、アホウドリの雛677羽（2024年3月：587羽）が確認された。この結果、今年度の鳥島総雛数は1,336羽（同1,173羽）で前年比13.9%（同7.8%）の増加となった。新コロニーではアホウドリの同時着地数が1,259羽（同1,129羽）を記録した。これらの結果から、アホウドリの鳥島推定個体群は概ね8,600羽以上となり、順調に増加していることが確認された。

2. 皇居調査－吹上御苑を中心とした皇居内鳥類相を明らかにする

担当者：黒田清子（フェロー）、齋藤武馬（研究員、以下同）、小林さやか、浅井芝樹、岩見恭子

事業費170千円

皇居内の鳥類相を調べるため、月1回の調査日を設け、9:00から12:00の間に約4.3kmのコースを3人の調査員で歩き、確認された鳥種を個体数とともに記録するセンサス調査を実施した。実施日は、4/2、5/10、6/4、7/2、8/6、9/6、10/1、11/8、12/10、1/9、2/4、3/4であった。

同様の目的で、標識調査を5月21－22日と10月22－23日の2回実施した。

3. 普及・広報事業

責任者：棚橋伸（事務局長）

事業費：4,879千円

(1) PR誌刊行・ウェブサイト編集事業（3,916千円）

(1-1) PR誌

山階鳥研NEWSを2024年5、7、9、11月、2025年1、3月に発行した。各号とも3,000部印刷した。山階鳥研NEWSの目次は、ウェブサイトの「刊行物」に掲載している。

(1-2) ウェブサイト

ウェブサイトについて、令和6年度は、随時行った「イベント情報」の更新と結果報告、論文の発行や人事異動・組織再編に伴うお知らせ、事業案内、助成事業、山階芳麿賞関連の更新を行った。また、今年度の「山階鳥研NEWS」から

- ・アホウドリとセンカクアホウドリ、鳥島を離れてどこに行く？
- ・令和5年度山階武彦助成事業対象者によるレポート「鳥類の耳の形態進化を探る：国際会議での研究報告」
- ・全日本バードカービングコンクール山階鳥研所長賞の報告
- ・山階鳥研収蔵のコウテイペンギンのはく製 東京農業大学「食と農」の博物館企画展「南極飯！」で展示
- ・アホウドリの長寿記録が更新され、42年7か月となりました
- ・第23回山階芳麿賞記念シンポジウム開催報告
- ・理事長年頭挨拶
- ・企画展「山階芳麿博士の作った図鑑」
- ・所員エッセー「高山での鳥類調査の苦労と楽しみ」
- ・小笠原諸島鳥島（むこじま）のアホウドリ、初めて1シーズンで3羽が誕生

- ・鳥類の筋骨格と羽ばたき運動
 - ・令和4年度山階武彦助成事業対象者によるレポート「アラスカ州ミドルトン島におけるウトウとエトピリカの行動生態調査」
 - ・ヤンバルクイナ野生復帰の試み
- などの記事をピックアップして掲載した。

(1-3) SNS

SNSサービスのfacebookとXでの発信を継続的に行った。年度内の発信数は、facebookで186投稿、Xで199ポストであった。年度末の時点でfacebookのフォロワーは3,700人、Xのフォロワーは9,200人であった。

動画投稿に特化したSNSサービスのYouTubeでは35本のコンテンツを新たに公開した。新しい試みとして、鳥島から定点カメラによるライブ配信を行った。内包するオリジナルコンテンツへはチャンネルからダイレクトにアクセスできるほか、ウェブサイト（アホウドリサポーターランディングページ）からのリンク、Xまたはfacebookの投稿からのリンクなどがある。年度末時点のチャンネル登録者数は2,550人、総視聴回数69,476、総再生時間14,095であった。

(1-4) 報道発表

下記8件のプレスリリースを行った。

- ・令和6年6月7日 第23回山階芳麿賞 記念シンポジウムのご案内
- ・同 第23回山階芳麿賞内藤靖彦博士への贈呈を決定しました
- ・令和6年6月11日 小笠原諸島智島のアホウドリ、初めて1シーズンで3羽が誕生
- ・令和6年7月12日 山階鳥類研究所の我孫子市移転40周年を記念した企画展を開催します
- ・令和6年11月12日 鳥類標識調査100周年記念公開シンポジウムを開催します
- ・令和7年1月23日 アホウドリの長寿記録が更新され、42年7か月となりました
- ・令和7年2月20日 100年間蓄積されたデータで渡り鳥を守れ！ーアジア最大級の鳥類ビッグデータ活用のすすめー（森林総研との共同リリース）
- ・令和7年2月21日 鳥類標識調査100周年を機に、当調査に関する論文の特集号が出版されました

(2) 講習会等事業（236千円）

(2-1) 所内見学会

所内見学会は、講堂で約1時間半、スライドと口頭説明で山階鳥研について紹介するもので、原則として第4金曜日の午前と午後に行った。このほか、おもに環境保全や生物学関係の団体や学校教科の一環としての学生生徒の見学希望について、第4金曜日以外であっても日程その他の調整がつく範囲で限定的に対応した。これらの見学会の参加人数の上限は1回あたり20名とした。令和6年度はこれらの見学会を合計11回行い、合計54名の参加者があった。個人のほか、団体として小笠原村議会、神奈川県高等学校教科研究会理科部会、千葉県立生涯大学の参加があった。

(2-2) ジャパン・バード・フェスティバル

ジャパン・バード・フェスティバルは我孫子市、日本鳥類保護連盟、山階鳥研、市民団体等で構成する実行委員会が我孫子市内を会場に実施するイベントである。令和6年度は11月2日と3日に開催した。

研究所では講堂で研究員が研究紹介をする「山階鳥研 見にレクチャー」を実施した。2日間で10タイトル、13講演を行い、のべ404名の入場者があった。

鳥学講座は、山階鳥研と我孫子市鳥の博物館の共催により、鳥類学の第一線で活躍する研究者が分かりやすく研究を紹介するもので、ジャパン・バード・フェスティバルの参加行事として開催している。今回の講座は11月2日（土）に早稲田大学 人間科学学術院 助教の澤田明氏の講演「リュウキュウコノハズクの生活を追いかけて～足環調査の継続で、現在進行形の進化を記録する～」を我孫子市生涯学習センターアビスタ 1Fホールで開催した。参加者は、合計111名であった。

(2-3) 鳥のサイエンストーク

山階鳥研職員または我孫子市鳥の博物館の学芸員が研究の成果などについて約30分のレクチャーでわかりやすく紹介する「鳥のサイエンストーク」を、毎月1回（第3土曜日）に我孫子市鳥の博物館と共催しており、新型コロナウイルス感染症流行以降はオンライン配信の形で実施している。

令和6年度の開催回数は10回で、タイトル、演者と日付ならびに、当日の最大視聴者数、見逃し配信の期間と再生回数は次のとおり。見逃し配信は、演者の希望によって行わない場合と、2週間行った場合がある。演者の氏名に*を付したのは我孫子市鳥の博物館の学芸員、無印は山階鳥研の研究員または専門員である。

- ・「足環解読捜査班の事件ファイル」（千田万里子、4月20日、69人、2週間、1,049回）
- ・「世界のトキ 1桁から5桁への復活」（尾崎清明、5月18日、49人、2週間、578回）
- ・「国立科学博物館が所蔵するヤマイヌ剥製標本はニホンオオカミか？」（小林さやか、6月15日、67人、2週間、734回）
- ・「絶滅した飛べないクイナ復活の謎」（浅井芝樹、7月20日、66人、2週間、881回）
- ・「「山階図鑑」とはどのようなものだったのか」（鶴見みや古、8月17日、54人、2週間、521回）
- ・「鳥類のCT撮影から恐竜を科学する」（脇水徳之*、10月19日、62人、2週間、687回）
- ・「1枚の羽根から探る鳥類の生活」（富田直樹、12月21日、63人、2週間、881回）
- ・「皇居に飛来したヤツガシラの話」（平岡考、令和7年1月18日、61人、2週間、797回）
- ・「富士山の多様な自然環境と生息する野鳥との関係」（森本元、同2月15日、79人、なし）
- ・「鳥の標本を作ろうー翼標本編ー」（望月みずき*、同3月15日、78人、2週間、1,265回）

(2-4) 問い合わせ対応

山階鳥研では、一般、行政、警察、マスメディア等から電話、電子メール、郵送等で多数の問い合わせを受けている。新型コロナウイルス感染症の流行以降、引き続きウェブサイトには電話での問い合わせに対しては極力電子メールに切り替えていただくようお願いする旨を記載している。この結果、いったん受けた後に別の部署に回したものも含め、326件の問い合わせに対応した。ただし、研究所内の別の部署で直接受けた問い合わせ件数は含まない。内訳を「令和6年度広報対応質問内訳」表（次ページ）に示した。

(3) 顕彰事業（727千円）

山階芳麿賞は、わが国の鳥学研究の発展と鳥類の保護活動に寄与された個人あるいは団体を顕彰する目的で設けられた賞で、現在は隔年に贈呈している。第23回山階芳麿賞は、前年度に行った選考の結果、国立極地研究所名誉教授の内藤靖彦氏への贈呈が決定しており、令和6年度に贈呈式と記念シンポジウムを開催した。

贈呈式は、7月22日にグラウンドハイアット東京で東日本地区賛助会員の集いとともに開催し、賞を贈呈した。総裁秋篠宮皇嗣殿下から表彰状と記念メダルを贈呈し、共催の朝日新聞社の羽根和人執行役員ブランド戦略担当より副賞（朝日新聞社賞）として楯と賞金50万円が贈呈された。

記念シンポジウムは、9月21日に東京大学弥生講堂において「超小型の記録計で動物の生活を探る～バイオリギングの歩みと動物研究」（主催：（公財）山階鳥研、共催：朝日新聞社、後援：我孫子市）と題して開催した。

講演3題の後で、会場から受けた質問をもとに質疑応答を行った。講演タイトルと演者は次のとおり。

- ・「バイオリギングの始まりとゾウアザラシ、そして鳥類の生態解明へ」

国立極地研究所 名誉教授／総合研究大学院大学 名誉教授 内藤靖彦

- ・「ペンギン遊泳のダイナミックス」 東京大学大気海洋研究所 教授 佐藤克文

- ・「バイオリギングによる海鳥研究の最前線」 国立極地研究所 教授 高橋晃周

参加はシンポジウム当日に現地での受付とし、参加者は168名だった。

本シンポジウムの録画を3講演と質疑応答の4本の動画（43分、30分、37分、15分）として、平成7年3月末までYouTubeで公開した。

令和6年度広報対応質問内訳（分野、分類群（科）、質問者、通信手段）

		件数	内訳(%)
分野	標本	1	0.3%
	生態	119	36.5%
	識別同定	96	29.4%
	救護/保護	18	5.5%
	形態・構造・体色・器官	15	4.6%
	鳥害	10	3.1%
	監修	4	1.2%
	標識	3	0.9%
	名称・文化・歴史・伝説(伝承)	3	0.9%
	保全	3	0.9%
	分類	2	0.6%
	鑑定	2	0.6%
	鳥の生物学一般	1	0.3%
	飼育	1	0.3%
	鳥インフルエンザ	1	0.3%
	学名・英名・和名	1	0.3%
	その他	46	14.1%
	合計	326	100.0%
分類群(科)	カモ	24	7.4%
	ヒタキ	21	6.4%
	ハト	17	5.2%
	タカ	14	4.3%
	キジ	13	4.0%
	ツバメ	13	4.0%
	アホウドリ	12	3.7%
	カラス	9	2.8%
	サギ	9	2.8%
	カワセミ	8	2.5%
	アトリ	8	2.5%
	スズメ	7	2.1%
	カモメ	7	2.1%
	クイナ	6	1.8%
	シジュウカラ	6	1.8%
	ハヤブサ	6	1.8%
	フクロウ	5	1.5%
	ホオジロ	5	1.5%
	メジロ	5	1.5%

		件数	内訳(%)
	ムクドリ	4	1.2%
	シギ	4	1.2%
	ウグイス	4	1.2%
	エナガ	4	1.2%
	ツル	3	0.9%
	チドリ	3	0.9%
	ウ	3	0.9%
	ミズナギドリ	3	0.9%
	カッコウ	2	0.6%
	インコ	2	0.6%
	チメドリ	2	0.6%
	ペンギン	2	0.6%
	キツツキ	1	0.3%
	ヒヨドリ	1	0.3%
	コウノトリ	1	0.3%
	セキレイ	1	0.3%
	モズ	1	0.3%
	ウミツバメ	1	0.3%
	その他	78	23.9%
	鳥類全般/鳥一般	9	2.8%
	渡り鳥全般	2	0.6%
	合計	326	100.0%
質問者	個人	232	71.2%
	報道出版関係（うちNHK関係20件）	68	20.9%
	一般事業会社、諸団体	15	4.6%
	官公庁・警察	8	2.5%
	教育関係(学校、博物館、動物園など)	3	0.9%
	合計	326	100.0%
通信手段	電話	163	50.0%
	E-mail/FAX	147	45.1%
	手紙・葉書	6	1.8%
	SNSのDM	6	1.8%
	来所面談	4	1.2%
	合計	326	100.0%

4. 山階武彦助成事業

助成事業 事業費 1,920千円

山階武彦助成として、令和6年度助成対象者10名に対し、計2,000千円の助成を行った。うち2名から未使用分として約80千円が返金されたので、事業費は1,920千円となった。

氏名	所属機関	会議・活動名	開催国・活動国
池内俊雄	雁の里親友の会	The 21st Goose Specialist Group Meeting	チェコ
江指万里	北海道大学大学院理学院自然史科学専攻	International Society for Behavioral Ecology Congress 2024	オーストラリア
金杉尚紀	北海道大学大学院理学院自然史科学専攻	International Society for Behavioral Ecology Congress 2024	オーストラリア
五藤花	北海道大学環境科学院	International Society for Behavioral Ecology Congress 2024	オーストラリア
白井あやか	兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科	コウノトリ国内野生復帰個体群と大陸野生個体群の行動特性の比較（調査）	中華人民共和国
渡久地豊		Khovd Bird Ringing Station（モンゴル）での鳥類標識調査	モンゴル
戸部有紗	京都大学野生動物研究センター	カンムリワシを含む、台湾に生息する猛禽類の視察（調査）	台湾
鳥飼久裕	特定非営活動法人奄美野鳥の会	Khovd Bird Ringing Station（モンゴル）での鳥類標識調査	モンゴル
Batmunkh Davaasuren	Wildlife Science and conservation Center of Mongolia	鳥類標識調査事業	日本
吉川翠	国立科学博物館動物研究部	準絶滅危惧種アッサムモンキーのオトナオスの行動レポーター（調査）	タイ王国

II. 文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）による研究事業

研究事業名：鳥の学問に関する資料・知識・技術を次世代に伝えるための研究事業

（採択年度 令和6～8年度3年間 各年度事業費56,000千円）

目的：

当研究所には、鳥に関わるあらゆる学問を支える基盤として、国内はもとより世界的にも第一級の重要性を持つ資料を保有している。このため当研究所は、鳥の学問を探究する研究者にとって欠くことのできない研究の拠点となってきた。これらの資料を拡充しながら管理維持し、公開していくことは社会的使命である。また、資料の一般への認知度を高めることで学術的資料への広い関心を呼び起こす。さらには、当研究所が持つ鳥学に関する知識・技術を伝えることにより、これまでの事業内容を実実に次世代へ伝える基盤を整備する。この事業を遂行するために次の研究項目を設定した。

① 収集管理

これまでの事業で一貫して行ってきた資料群の収集と管理を行う。

② 公開

一般向け、学術向けを問わず、資料群へのアクセスを容易にする公開を行う。

③ 人材育成

次世代育成のために知識・技術の収集管理や講習会、実習等を行う。

実施体制：

(0) 総括班 責任者 小川博（所長）

(1) 収集管理班 責任者 鶴見みや古（文化資料ディレクター）

(2) 公開班 責任者 浅井芝樹（研究員）

(3) 人材育成班 責任者 水田拓（自然誌・保全研究ディレクター）
令和6年度実施状況：

(0) 総括班

令和6年度意見交換会の開催

開催日：令和6年10月11日（金）オンライン開催

出席者：特任研究員、総括班メンバー、客員研究員、フェロー、外部有識者、総裁、職員等

令和6年度研究成果発表会の開催

開催日：令和7年2月7日（金）

会場：東京大学農学部フードサイエンス棟 中島董一郎記念ホール

出席者：公官庁幹部、総括班メンバー、特任研究員、客員研究員、フェロー、総裁、顧問、理事・監事、評議員、職員等

(1) 収集管理班

【標本・組織サンプル等】標本2,487点、組織サンプルあるいはDNAサンプル2,085個体分を入手した。これらの情報を管理用データベースに登録した上で、新規に入手した標本700点を収蔵庫に、DNA溶液を含む組織サンプル2,626点を冷凍庫・冷蔵庫に配架した。DNAバーコードデータ70点、安定同位体比データ50点を収集した。

【図書及び鳥学資料】図書1,856冊、鳥学資料1,229点を配架した。在野の鳥学研究者2名のフィールドノートおよび調査データ（デジタル）の寄贈を受けた。雑誌96冊を製本し、513点の図書について修理および保存処理を行った。

【資料の保管管理】温湿度管理、害虫・カビの発生状況のモニタリング、殺虫剤の噴霧を1回行った。

【利用者対応】標本閲覧21件（のべ29人）を受け入れた。標本貸出3件（のべ10点）に対応した。組織サンプルは5件の提供申請を審査し、2件提供した。図書閲覧14件（のべ14人）を受け入れた。その他、資料貸出3件（135点）に対応した。

(2) 公開班

【資料群の公開】ウェブサイト『標本データベース』を運営し、1,221点の標本データを追加した。閲覧者数はのべ3,119,523人であった。S-Netへ3,000件の標本情報を提供した。鳥体内部構造のX線CT画像37個体237点のデータを標本データベースに追加した。羽毛の走査電子顕微鏡画像55点のデータを標本データベースに追加した。ヨタカ類の新しい種和名を整理した報文を『山階鳥類学雑誌』56巻2号に掲載した。提供可能な組織サンプル14,322個体分のリストをアップロードした。『図書・文化資料データベース』を運営し、図書1,938点と鳥学資料211点のデータを追加した。閲覧者数はのべ397人であった。『BOLD System』にDNAバーコードデータ70点を追加した。ウェブサイトで公開する安定同位体比データベースの基本構造が完成した。

【学術誌の刊行】山階鳥類学雑誌56巻1号、2号を刊行した。J-Stageで公開された電子版へのアクセス数は29,665件であった。

【ウェブサイトの整備】山階鳥研が資料保管を担っていることを紹介する一般向け動画、標本作製や標本の管理について解説した動画を作成し、公開した。

【一般向けセミナー・解説等】我孫子市鳥の博物館とともに実施している一般向けオンラインセミナーで8回講演した。11月2、3日に開催されたジャパンバードフェスティバルではのべ13講演を実施した。一般からの質問326件に対応した。「捕獲未経験者への基礎知識の提供をテーマにした講習会」で使用されている教材資料の公開に際しては、野外での濫用が懸念される技術等の公開制限を検討した。

(3) 人材育成班

【映像資料の収集】新潟県福島潟において小鳥類の捕獲作業を撮影した。講習会・実習教材として秋田県大潟村においてキャノンネットの設置方法、北海道函館市においてくくり罠による水鳥の捕獲方法についての映像資料を収集した。

【講習会・実習】捕獲未経験者への基礎知識の提供をテーマにした講習会を11月30日～12月1日に京都市動物園にて開催し、13人が受講した。また、9月24日にセンサス・捕獲技術に関する講演を国際基督教大学で開催した。かすみ網による小型陸鳥の捕獲をテーマにした野外実習を

福島県にて6回開催し、のべ22人が受講した。海鳥コロニーでの捕獲をテーマにした野外実習を青森県、伊豆諸島、京都府で各1回開催し、のべ14人が受講した。大型水禽類（ガン類）の捕獲をテーマにした野外実習を北海道宮島沼、野付湾、宮城県伊豆沼で各1回開催し、のべ15人が受講した。データロガーや発信器を装着する手法の講習会・実習を当研究所、滋賀県、宮城県で各1回開催し、のべ17人が受講した。鳥類標本の作製技術を伝える実習を、6月9～12日に森林総合研究所九州支所において34人を対象に、9月17日に当研究所で10人を対象に、12月22日に相模原市立博物館で10人を対象に開催した。

III. 科学研究費補助金（除 特定奨励費）による研究事業

1 「失われた標本の価値を回復する研究—山階芳麿コレクション」

- ・ 基盤研究 C（基金）R3～R6
- ・ 代表者：小林さやか（研究員）
- ・ R5年度 直接経費：408千円

本研究では、古い標本の歴史的背景を調査する過程で標本に関連する資料や文献を見出して、個々の標本に「正しい情報」を与え、情報が不明確とされてきた古い標本と、その証拠となる資料の双方の研究資源としての価値を向上させることを目的としている。古い標本は、長期間の保存の過程で、本来保有していたはずの「いつ」、「どこで」採集されたかという情報が、ラベルの誤読、管理者の変更で伝達されなかったなどの理由で、不明確な場合がある。本研究では、山階芳麿コレクション約3万点について、採集旅行ごとに標本群を構築し、構築した標本群ごとに歴史的背景を調査し、各標本がいつ、誰によって、どのような目的で採集されたものかを解明する。この結果、得られた情報は論文発表したり、「山階鳥類研究所標本データベース」に反映させることで、山階芳麿コレクションの価値を向上させ、自然科学に貢献することができる。

令和6年度は、調査が進んだ研究について国際学会や国内の学会で発表した。

2 「希少種カリガネの越冬生態が個体群動態に及ぼす影響に関する研究」

- ・ 基盤研究 C（基金）R4～R6
- ・ 代表者：澤祐介（研究員）
- ・ R6年度 直接経費：1,128千円

カリガネはIUCNレッドリストでVUに指定され世界的に減少が続いているが、日本の越冬個体群は個体数が増加しており、その越冬数は2019年には東アジア地域個体群の4.5%を占めるなど、世界的にも重要な個体群である。さらに、越冬期の採食地における農地への依存の割合が高いなど他の個体群にはない特徴的な生態をもつ。本研究では、日本の個体群増加要因の検証に向け、農地環境における越冬生態の解明及び追跡による繁殖地の特定を目的とする。

令和6年度は、これまでに捕獲し発信器追跡を行っているカリガネ9羽について、継続して発信器追跡を行った。さらに、収集したカリガネの糞をDNAメタバーコーディングにより、食性解析を実施した。

3 「適応放散のメカニズムを解明する一分散力の進化的変化に注目して」

- ・ 基盤研究 B（基金）R4～R7
- ・ 代表者：山崎剛史（研究員）
- ・ R6年度 直接経費：1,730千円

令和6年度には、まず、高知工科大学小林豊教授とともに、分散力の進化的変化を仮定した適応放散の新理論を発表した（Yamasaki, T., Kobayashi, Y. 2024. Evolving dispersal ability causes rapid adaptive radiation. *Scientific Reports* 14, 15734）。また、広島大学米澤隆弘教授とともに、この理論の検証のため、八重山諸島のオサハシブトガラスのゲノム解析を進めた。最後に、小林教授、東京大学萩原直道教授とともに、この理論の拡張として、文化進化の影響を組み込んだ数理モデルを構築し、論文の執筆を進めた。

4 「隠蔽種を含む特別天然記念物アホウドリの生殖隔離に関連する行動学的研究」

- ・ 基盤研究 C（一般）R6～R8
- ・ 研究代表者：富田直樹（研究員）

- ・分担事業：研究統括、野外調査、行動解析
- ・R6年度 直接経費：2,280千円

本研究は、隠蔽種を含むアホウドリの保全単位の再検討を最終目標として、アホウドリ2タイプ間の生殖隔離を可能にする生態的要因を個体レベルで検証する。令和6（2024）年度は、洋上で捕獲したセンカクアホウドリ3個体の追跡に成功し、非繁殖期の利用海域が鳥島のアホウドリと異なることを明らかにした。

5 「構造色特有の発色機構が進化させる信号進化：色素とは異なる発現特性と機能の解明」

- ・基盤研究 C（一般）R6～R8
- ・代表者：森本元（研究員）
- ・R6年度 直接経費：1,080千円

本研究課題は、鳥類における構造色の発色特性と生態の関連性を独自の視点から明らかにすることを目指している。プロジェクト1年目である今年度は、主に富士山地域において構造色であるルリビタキなどを中心とした山地鳥類の生態モニタリング、および、ラボ内での羽毛の分析装置のテストや準備を中心に進めた。

6 「鳥類標本の羽から探る生態と種分化」

- ・基盤研究 B（一般）R3～R7
- ・研究代表者：武山智博 岡山理科大学 准教授
- ・研究分担者：岩見恭子・富田直樹・水田拓（研究員）
- ・分担事業：分析資料収集・野外調査
- ・R6年度 直接経費：600千円（岩見）、100千円（富田）、500千円（水田）

博物館等に収蔵されている生物標本は、分類学や過去の生息地の解析等に不可欠であるが、学術的な利用目的は限られている。近年、新たな標本の活用方法として、遺伝的多様性の復元などが模索されているが、標本の損傷を最小限に留める制約上、応用範囲は限定的である。令和6（2024）年度は、鳥類標本の学術的価値を維持した羽試料の採取方法を確立するため、小中型のスズメ目標本の部位ごとの羽試料の採取方法の検討および安定同位体比分析を進めた。また、安定同位体比分析により絶滅危惧種の食性を把握し、その保全に資するために、琉球列島の絶滅危惧種について羽毛および血液サンプルを採取した。

7 「鳥類における化学防御の時空間ダイナミクスとその進化の解明」

- ・基盤研究 B（一般）R5～R9
- ・研究代表者：大阪公立大学 吉川徹朗 准教授
- ・研究分担者：岩見恭子・齋藤武馬（研究員）
- ・分担事業：分析資料収集・野外調査
- ・R6年度 直接経費：250千円（岩見）、250千円（齋藤）

捕食者が忌避する物質を用いることで身を護る化学防御は、昆虫などの無脊椎動物で広く知られているが、脊椎動物におけるその実態については、いまだ知見に乏しい。これまで見過ごされてきた鳥類における化学防御の実態を探るため、日本各地のフィールドにおける捕獲調査と標本調査を行い、複数種の体組織のサンプリングを進め、化学分析手法により成分を検出・定量する。これまで博物館に収蔵されている標本などから、さまざまな日本産鳥類について体組織サンプルの収集を進めた。南西諸島などの島嶼部を含めた日本列島各地において、化学防御を行なっている可能性のある候補種を野外で捕獲し、それらの種の体組織や糞のサンプリングを進めた。

8 「ロボット工学が飛行の起源の謎を解くー鳥類を用いた実証研究」

- ・挑戦的研究（開拓）R6～R8
- ・代表者：千葉大学 中田敏是 准教授
- ・研究分担者：山崎剛史（研究員）
- ・R6年度 直接経費：1,500千円

令和6年度には、翼標本を活用し、鳥の翼の柔らかさの可視化を進めた。その結果として、無飛翔性の鳥と飛翔性の鳥には、風切羽の柔らかさのパターンに明確な違いがあることがわかってきた。

この知見をもとに、東京科学大学小林航己氏・田中博人准教授とともに、無飛翔性のヤンバルクイナ、飛翔性のシロハラクイナの模倣翼を工学的に作製し、性能の違いの検証を進めた。

9 「足元にある未知生態系：コケ類の生態系機能と適応進化を動物との相互作用から読み解く」

- ・ 基盤研究（B）（一般）R4～R7
- ・ 研究代表者：今田弓女 京都大学 助教
- ・ 研究分担者：森本元（研究員）
- ・ 分担事業：野外研究
- ・ R6年度分担金 直接経費：100千円

森林生態系におけるコケの役割はほとんど未知であるが、さまざまな節足動物や鳥類と深く関わっており、コケならではの生態系を形成していることが近年、分かってきた。そこで本研究は、コケが多様な動物といかに相互作用しつつ適応進化してきたかにせまるプロジェクトである。本研究課題は、愛媛大学の今田助教を代表者とし、山階鳥研の森本元研究員を含む4名の分担者によって構成される研究体制で4年間（R4～R7年度）実施される。森本研究員は分担者として、長年の山地鳥類生態研究を活かし鳥類との関係を探る。本年度は代表者の鳥類研究の補助および代表者が指導する学生らと議論を重ねるとともに、苔を利用した営巣に関する野外調査を実施した。また、共著論文が受理・発表された。

10 「人工物により支えられる都市の鳥類多様性：日本独自の多様性維持機構」

- ・ 基盤研究 C（基金）R6～R8
- ・ 代表者：三上修 北海道教育大学 教育学部教授
- ・ 分担者：森本元（研究員）
- ・ 分担事業：野外調査、行動解析
- ・ R5年度 直接経費：50千円

本研究課題は、北海道教育大の三上修教授を代表者、石川県立大の上野裕介准教授と山階鳥研の森本元研究員を分担者とした研究体制で3年間（R6～R8年度）実施される。都市における人工構造物が鳥類の生態へどのように関わっているかを明らかにするプロジェクトである。計画1年目である今年度は、道路環境における人工構造物と都市鳥類の関係の野外調査を実施するとともに、共同で関連研究のとりまとめを実施した。また、共著論文の作成も行った。

IV. 農林水産省による研究事業

1 国際水産資源動態等調査解析事業

- ・ 活動名：日本周辺で繁殖するアホウドリ類の分布回遊経路の解明
- ・ 責任者：富田直樹（研究員）
- ・ 事業期間：R1（2019）年度から実施、申請・決定は1年単位
- ・ R6年度 補助金額：2,300千円

混獲生物の資源評価における基礎的知見の収集、包括的アプローチとして繁殖場における繁殖状況調査を実施する。令和6（2024）年度は、鳥島で繁殖するクロアシアホウドリ7羽にGPSアルゴス発信機を装着し、移動経路や採餌海域を追跡中である。

V. 民間助成金・その他補助金等による研究事業

1 公益信託サントリー世界愛鳥基金（鳥類保護団体への活動助成部門）

- ・ 活動名：絶滅危惧種アホウドリの保全に資する利用海域の特定
- ・ 責任者：富田直樹（研究員）
- ・ 助成期間：R6年度（2024年度）
- ・ R6年度助成額：2,000千円

絶滅危惧種アホウドリは、別種ほどに異なる2つの集団からなることが明らかとなり、それぞれの独自性を保つ保全策の検討が急務となっている。本活動の主な目的は、尖閣諸島個体群のセンカクアホウドリの周年の利用海域を明らかにすることである。今年度は洋上捕獲した2個体に衛星追跡型GPSを装着し、利用する海域が季節ごとに異なることを明らかにした。

2 公益財団法人JAC環境動物保護財団

- ・活動名：ヤンバルクイナ保全のための生態研究と啓発
- ・責任者：尾崎清明（副所長）
- ・助成期間：R6年度（2024年度）
- ・R6年度助成額：2,000千円

ヤンバルクイナの生態、特に繁殖生態を明らかにする目的で、電波発信機と自動撮影カメラによる調査を実施した。電波発信機では個体の生存期間、行動範囲や営巣行動等を追跡し、自動撮影カメラでは主に繁殖中の天敵による影響や卵の孵化率、雛の生存等をモニタリングした。今年度、新に飼育放鳥6個体と野生4個体を加えて追跡を実施した。その結果8番11個体の営巣状況をモニタリングでき、4番での繁殖成功を確認した。また、死亡が判明した11例のうち、死因はネコによる捕食が3例、カラスとハブによるものが各1例確認された。これらの知見は環境省の保護増殖検討会に提供するとともに、名護博物館公開シンポジウム、日本鳥学会大会等で発表した。

3 キャノン研究助成 新産業を生む科学技術

- ・活動名：鳥類学と航空工学の協同による飛翔の新たな理解と応用
- ・責任者：岩見恭子・富田直樹（研究員）
- ・助成期間：R4～6年度
- ・R6年度助成額：1,900千円

研究目的：鳥類学と航空工学の研究者が共同で未知なる鳥のしくみや生存戦略を探求し、エネルギー効率や機動性といった飛行性能だけでなく耐故障性や低騒音といった課題を解決する新たな技術を創成するとともに、これまでにない新しいサービスの提供を目指す。そのために、バイオロギングによって取得する鳥の飛行データを参照しながら、機構を内蔵した「動く剥製」を開発して、風洞実験を実施する。生きた鳥の飛行データと剥製の風洞実験で得られた空力・飛行特性から、鳥類学・航空工学双方の研究を新たな段階に推し進める。令和6（2024）年度はセンサーを内蔵した大型及び小型鳥類の剥製に加え、鳥類の骨格構造を元に機構を内蔵した剥製を用いて風洞実験を実施し、風速や迎角を変えたときの揚力と抗力の時系列データを取得した。

4 韓国環境生態研究所

- ・活動名：鳥インフルエンザ感染経路解明のための渡り性水鳥追跡
- ・責任者：澤祐介
- ・助成期間：R6年度（2024年度）
- ・R6年度助成額：1,486千円

近年、高病原性鳥インフルエンザが世界各地で流行しており、日本を含む東アジアにおいても、その動態の解明と対策は喫緊の課題となっている。高病原性鳥インフルエンザの感染が懸念されるガンカモ類、ツル類などの渡り性水鳥を対象に、発信器追跡を行う。

令和6年度は、マナヅル4羽、カモ類28羽、ユリカモメ6羽、ミサゴ1羽の合計39羽を追跡した。

5 米国魚類野生生物局（U. S. Fish and Wildlife Service）

- ・活動名：State of the Birds Award
- ・責任者：富田直樹（研究員）
- ・助成期間：R6～R8年
- ・R6年度助成額：9,449千円

本研究は、アホウドリの保全状況の再検討のために必要な個体群動態の基礎データを得ることを目的として、伊豆諸島鳥島のアホウドリ繁殖地における抱卵期の卵数と育雛期の雛数をカウントした。令和6年11月と令和7年2～3月に調査を行った結果、1,741卵、1,337雛が確認された。

6 米国魚類野生生物局（U. S. Fish and Wildlife Service）

- ・活動名：Alaska Ecological Services Conservation and Recovery Award
- ・助成期間：R4～R8年
- ・責任者：水田拓
- ・R6年度助成額：3,740千円

小笠原諸島聳島において、飛来数及び繁殖つがい数を増加させることを目的として翌年度から実施予定の誘引調査のため、アホウドリデコイ修理と音声誘引装置作成を行った。

7 第35期（2024年度）プロ・ナトゥーラ・ファンド助成

- ・活動名：日本の鳥類標識調査の100年一次の100年間の発展に向けたシンポジウムとワークショップの実施－
- ・責任者：水田拓（自然誌・保全研究ディレクター）
- ・助成期間：R6年10月～R7年9月
- ・R6年度助成額：1,000千円

生物多様性の損失を食い止め、回復させる「ネイチャーポジティブ」が国際目標となっている現在、生物を一定の方法で観察し続ける「モニタリング」は、生物多様性を評価し監視するために必要不可欠な行為である。鳥類標識調査は鳥類の動態を定量的、継続的にモニタリングする手法であり、日本では1924年以来、100年にわたり実施されている市民科学であるが、残念ながらその知名度は高いとはいえない。また、すぐに明確な成果が出るわけではない本調査は、近年予算が削減される傾向にあり、さらには高齢化や新規参加者数の伸び悩みによるボランティア調査員の減少も懸念されている。生物多様性国家戦略にも明記されている鳥類標識調査の知名度を今よりも上げ、次世代を担う調査員を育成することは喫緊の課題であり、そのために調査開始100周年を契機としてシンポジウムとワークショップを開催した。

VI. 受託・請負事業

令和6年度の受託および請負事業は以下の通りである。

	発注者	受託・請負事業等の名称	金額（円）	備考
1	環境省自然環境局生物多様性センター	令和6年度鳥類標識調査委託業務	36,010,000	受託随意契約
2	東京都小笠原支庁	令和6年度アホウドリ保全調査委託（単価契約）	5,136,120	受託競争入札
3	環境省	令和6年度シギ・チドリ類追跡業務	6,600,000	請負随意契約
4	環境省自然環境局生物多様性センター	令和6年度重要生態系監視地域モニタリング推進事業 小島嶼（海鳥）調査業務	13,750,000	請負参加者確認公募
5	環境省自然環境局生物多様性センター	令和6年度鳥類標識足環の購入	1,720,400	請負随意契約
6	九州地方環境事務所沖縄奄美自然環境事務所	令和6年度ヤンバルクイナ野生復帰技術確立のための試験実施等業務	1,793,000	請負競争入札
7	九州地方環境事務所沖縄奄美自然環境事務所	令和6年度ヤンバルクイナ野生復帰試験データ解析業務	900,000	請負随意契約
8	中部国際空港株式会社	セントレアにおけるケリの動向・行動圏調査	515,900	請負契約
9	株式会社長大	ノジコ調査結果解析	352,000	請負（再委託）
	合計9件		66,777,420	

（注1）第9項 株式会社長大からの請負事業は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構からの再委託である。

R6年度 事業報告 旧保全研究室 補足説明

- 鳥類標識センター（旧保全研究室）が行っている鳥類標識調査講習会（通称バンダー講習会）について：
- イ）バンダーとは、山階鳥研が環境省から委託を受けて行っている鳥類標識調査（バンディング）を支えるボランティア調査員のことである。バンダー講習会は、このバンダーを育成するために山階鳥研が行っているものである。
- ロ）講習は2回の実技講習と1回の講義講習で構成されており、実技講習は山階鳥研職員または実技

講師（後述する指導資格を取得したベテランバンダー）が実施する鳥類標識調査中に、候補者が講師より個人指導を受ける形で行われる。講義講習は年1回山階鳥研で山階鳥研職員により行われ、鳥学の基礎から捕獲方法、種や性齢の識別、データ入力、法令、海外情報など調査に必要な広範囲な内容が含まれる。

ハ）今年度は5～翌1月に北海道、宮城県、新潟県、山梨県、福井県、京都府、鹿児島県で行われた実技講習に14名、12月に山階鳥研で行われた講義講習に13名が参加した。すべての講習を修了した13名が令和7年4月から新バンダーとして活動を開始する。残り1名は引き続き次年度に受講する予定となっている。

ニ）バンダー資格を取得できる環境を全国各地に整備するために、実技講師を育成するための講習会（名称：実技講師研修会）を実施した。これは、すでに活動しているベテランバンダーへ新規バンダーの育成に携わってもらうことを目的とし、山階鳥研職員同様にバンダー講習会の実技講師を担う資格を取得してもらうためのものである。実技講師資格を取得したバンダーは、バンダー資格取得候補者の判定講習会の実施を担う。実技講師研修会の役目はこれだけでなく、将来的に実技講師資格取得を希望している既存バンダーや、自身の知識や技術の向上を望む既存バンダーの学習の場として機能するとともに、バンダーになることを志望する者の学びの場としても役割も持つ。今年度は10月に新潟県で開催し、実技講師候補者またはそうした知見を求める既存バンダー1名に対し研修を実施した。

VII. その他

1 職場体験学習生受け入れ

9月5、6日に流山市八木中学校から2年生2名、12月3、4日に流山市常盤松中学校から2年生2名の職場体験を受け入れた。研究所や研究内容の概要を説明したのち収蔵庫等の見学を行い、実務の一端として資料整理、標本作製、鳥類標識調査データ解析、ウェブサイトの更新、SNSへの投稿などを体験させた。

2 我孫子市教育委員会との連携協定締結

これまでに積み重ねてきた我孫子市との協力関係を一層深めるため、令和3年3月23日付けで連携に関する協定書を締結した。

連携の内容は、(1) 鳥類・自然環境に関する研究・調査に関すること、(2) 鳥類・自然環境に関する情報や資料に関すること、(3) 活動についての情報発信に関すること、(4) その他、本協定の目的に関する事項であり、実績事項の整理確認を記録・継続している。

3 京都市動物園との連携記念講演会

京都市動物園と、双方の野生動物に関する研究及び教育の事業をさらに発展させるための連携協定を平成30（2018）年11月12日に締結している。8月4日に尾崎清明副所長が「ヤンバルクイナの野生復帰作戦」と題して講演した。この催しは京都市動物園が主催して実施した。また、11月30日から12月1日にかけて、山階鳥研主催で山階鳥学セミナー（捕獲技術入門編）を京都市動物園と京都大学上賀茂試験地で開催した。

4 Bernice Pauahi Bishop Museum（米国、ハワイ州）との連携協定

平成31年締結した連携協定に基づき、継続してハワイミツスイ類の適応放散の研究と保護に焦点を定めた連携を継続した。

ビショップ博物館の脊椎動物コレクションの協力得て、以下の成果を得た

日本鳥学会2023年度大会 ポスター発表、タイトル：ビショップ博物館所蔵の書簡からわかった80年前の標本交換、発表者：小林さやか

令和6年1月に水田ディレクターが訪問し情報交換を行った。

令和6年12月に連携協定の5年間延長の契約を締結した。

5 芝浦工業大学柏中学高等学校との教育連携協定締結

芝浦工業大学柏中学高等学校と相互の教育交流を通じ、生徒の視野を広げ、進路に対する意識及び学習意欲を高めるとともに、中等教育の活性化を図ることを目的とする教育連携協定を締結して

いる。

これに基づき、7月6日に仲村昇研究員が「手賀沼の生態系、そして手賀沼の鳥類について」と題した講演を行った。

6 博物館実習受け入れ

8月19～23日に立教大学と日本獣医生命科学大学から各1名、9月12および17～20日に帯広畜産大学と酪農学園大学から各1名の博物館実習を受け入れた。研究所の概要を説明したのち、DNAバーコーディング、標識調査用備品の管理、図書資料の整理や文化資料の登録、広報業務、フィールドでの標識調査など、実際に行われている各種業務に従事させた。

【収益事業】

東京都渋谷区南平台町に所有するマンション3室を賃貸し、その収益を公益目的事業の用に供した。

1. 103号室

専有面積：104.81平方メートル

賃料月額：350千円

敷金：700千円（賃料の2ヶ月相当額）

更新料：350千円（賃料の1ヵ月分相当額）

契約期間：令和5年9月23日～令和7年9月22日（2年間R5から更新）

2. 104号室

平成29年5月1日をもって収益事業財産となった（旧公益目的事業財産）。

専有面積：122.57平方メートル

【前契約】

賃料月額：580千円

敷金：1,740千円（賃料の3ヵ月相当額）

更新料：580千円（賃料の1ヵ月分相当額）

契約期間：令和5年3月16日～令和7年3月15日（2年間R5から更新）

【新契約】

賃料月額：600千円

敷金：2,400千円（賃料の4ヵ月相当額）

更新料：600千円（賃料の1ヵ月分相当額、次回更新から）

契約期間：令和6年8月1日～令和8年7月31日（2年間R8から更新）

3. 204号室

専有面積：113.27平方メートル

賃料月額：370千円（10千円の値上げ）

敷金：720千円

更新料：185千円（賃料の0.5ヶ月分）

契約期間：令和5年11月20日～令和7年11月19日（2年間）

（原契約から、住宅賃貸借契約より定期借家契約に移行した）

*排水管不良あり、明渡し時にリニューアルを検討中

以上

III－3

旧保全研究室の事業活動

令和6年度は以下の内容で業務を受託または請負、調査・研究を行った。（ ）内は業務の委託者および担当者。

1. 鳥類標識調査・モニタリング

- ・ 鳥類標識調査委託業務（環境省自然環境局生物多様性センター）
鳥類の渡り状況の推移を把握するため、全国各地のボランティア調査員約400名の協力を得て、野鳥を捕獲し個体識別用金属足環を装着、放鳥した。主要ステーションでは定量評価の可能な調査を実施し、得られた放鳥回収データをデータベース化した。鳥類観測ステーションの建築物および物品・消耗品類の点検を行った。検討会を実施し、事業の評価と改善点の検討を行った。ボランティア調査員育成のための講習会を開催した。捕獲用かすみ網を購入し、全国の協力調査員に配布・貸与した。広報資料・業務報告書・調査報告書を作成した（水田・仲村・森本・富田・油田・澤・千田・浅井）
- ・ 重要生態系監視地域モニタリング推進事業（海鳥調査）（環境省自然環境局生物多様性センター）
検討会を開催し、調査結果等について検討した。
北海道大黒島、青森県弁天島・蕪島、岩手県三貫島、宮城県足島、山形県飛島・御積島、島根県経島、福岡県三池島、鹿児島県奄美諸島、沖縄県沖縄島沿岸離島・宮古群島・八重山諸島・仲ノ神島の各海鳥繁殖地において、繁殖数および個体数をモニタリングした。調査結果を過年度のデータと比較解析し、経年変化を明らかにした。2004～2023年度調査結果のとりまとめ報告書の素案を作成した。第4期とりまとめ報告書概要版の原稿を確定した。業務報告書・調査報告書を作成した。（富田・油田・澤）
- ・ 鳥類標識足環の購入（環境省自然環境局生物多様性センター）
鳥類標識調査に必要な個体識別用金属足環を購入し、全国の協力調査員に配布した。（仲村）
- ・ セントレアにおけるケリの動向・行動圏調査（中部国際空港株式会社）
中部国際空港に夜間に飛来し航空機と衝突するケリの対策を検討するため、捕獲したケリにGPSロガーを装着し、動向と行動圏を調査した。（水田・佐藤）

2. 保全

[ヤンバルクイナ]

- ・ 野生復帰技術確立のための試験実施等業務（環境省九州地方環境事務所 沖縄奄美自然環境事務所）
発信機を装着した飼育繁殖個体の追跡調査を行い、行動圏や繁殖実態等进行分析・考察した。追跡個体の異常が確認された場合は個体捜索や救護を実施した。（尾崎）
- ・ 野生復帰試験データ解析業務（環境省九州地方環境事務所 沖縄奄美自然環境事務所）
野生個体と試験個体について、生存率・繁殖結果の比較・解析を行った。専門家を交えた打合せを実施し、その意見を踏まえ、解析結果・第3期計画の評価・今後の課題と改善案を報告書にとりまとめた。（尾崎・森本）

[アホウドリ]

- ・ アホウドリ保全調査委託（東京都小笠原支庁）
アホウドリ繁殖地の再形成を図るため、雛移送が実施された賀島において、飛来状況等のモニタリングを実施した。調査結果の整理・解析、平成24年度から令和6年度までの総括、誘引の評価を行い、報告書にとりまとめた。（油田）

[シギ・チドリ類]

- ・ シギ・チドリ類追跡事業（環境省自然環境局野生生物課）
国内外のシギ・チドリ類渡り経路追跡のため、千葉県三番瀬、佐賀県有明海、北海道コムケ湖、千葉県/茨城県利根川下流域、宮城県鳥の海、北海道ウトナイ湖、沖縄県宮古島において、シギ・

チドリ類を捕獲し、カラーフラッグを付けて放鳥した。また全国から寄せられたカラーフラッグ観察情報および回収情報の解析を行った。発信器によるハマシギの行動圏調査を行った。(水田・仲村・千田)

[ノジコ]

- ・ 北陸新幹線、中池見湿地環境調査（株式会社長大）

令和6年度中池見ノジコ標識調査の結果をもとに、生息環境ごとの飛来個体数の比較を行った。着工前・着工中の結果と比較し、新幹線ルート建設の影響を分析した。ノジコの繁殖地の記録と比較し、個体数の増減傾向の特異性を解析した。(仲村)

Ⅲ－４

令和６年度科学研究費助成事業（特定奨励費）状況報告書

1. 研究事業名等 鳥の学問に関する資料・知識・技術を次世代に伝えるための研究事業

1. 研究事業名等	鳥の学問に関する資料・知識・技術を次世代に伝えるための研究事業						
学術研究諸団体の名称	公益財団法人山階鳥類研究所						
学術研究諸団体の代表者 職名・氏名	職名		理事長				
	氏名	(フリガナ)	ミブ モトヒロ				
		(漢字等)	壬生 基博				
研究事業期間	令和６年度～令和８年度（３年間）						
交付（予定）額 (単位：千円)	令和６年度		令和７年度		令和８年度		総計
	56,000		56,000		56,000		168,000
令和６年度 実支出額 (単位：円)		合計	費目別内訳				
			物品費	旅費	人件費・謝金	その他	
	【計画額】 (交付申請書に記載の使用内訳)	56,000,000	7,223,000	3,067,000	35,538,000	10,172,000	
	【実支出額】 ()内は利子で内数	56,017,152 (17,152)	9,122,417	2,262,686	34,665,121	9,966,928	
事務担当者 連絡先	職名		事務局長				
	氏名	(フリガナ)	タナハシ ノブ				
		(漢字等)	棚橋 伸				
	電話番号：04-7182-1101						
	E-mail：tanahashi@yamashina.or.jp						

2. 研究事業の目的

創設者である山階芳麿(やましな・よしまろ, 1900-1989)が1932(昭和7)年に設立したアジアで最も古い鳥学専門の学術研究機関として、山階鳥類研究所は90年を超える歴史の中、一貫して鳥の学問を支える多様な資料の収集に取り組み、関連分野の発展を支えてきた。

その中心となる鳥類標本資料は、国内最大の7万点以上を有しており、世界の鳥種のほぼ半数をカバーしている(特に日本・韓国・台湾・太平洋地域の標本に富んでおり、この地域産の標本所蔵数は世界最大である)。多数の絶滅種や希少種の標本、新種や新亜種の報告の際の証拠であるタイプ標本をはじめ、ミヤコショウビンやカンムリツクシガモ雄の標本といった世界で当研究所のみが所蔵しているものもある。19世紀のイギリスで活躍したジョン・グールドの鳥類図譜など、世界的な稀覯書を含む4万冊を超える図書資料も充実している。

このように当研究所は、鳥に関わるあらゆる学問、自然科学はもとより、人文科学や芸術なども支える基盤として、第一級の重要性を持つ多様な資料を所蔵している。このため当研究所は、鳥の学問を探究する研究者にとって、欠くことのできない研究の拠点となってきた。これらの資料を拡充しながら維持管理し、公開していくことは、当研究所の社会的使命と考え、平成13年度に初めて科学研究費補助金特定奨励費に採択されてから、20年以上その任にあたってきた。



絶滅鳥カンムリツクシガモの標本(雌雄)。手前が世界に1つだけの雄標本。



捕獲未経験者へ基礎知識を提供する講習会の様子。

これまでの事業により、標本をはじめとする各種資料類の収集、管理、公開の手順は確立され、効率的に実施されるようになってきた。今後もこれらの事業が重要であることに変わりはないが、資料群が管理され公開されていても、それらの一般への認知度をさらに高めたり、活用方法を提示することがさらに必要である。例えば、これまでの事業によって整備された『標本データベース』は当研究所の学術標本へのアクセスを容易にし、公開されたデータが直接論文に使われるなどの効果をもたらした。しかし、標本がどのように利用できるのか、なぜそのように整理されているか、一般向けの説明が不十分であり、普及啓発の活動は改善の余地がある。本事業では、学術的資料への広い関心を引き起こすために、資料群の存在やその利用の仕方について紹介する動画をウェブサイト

上に公開するなどの新たな取り組みを行う。また、資料群の価値をより高めるためには、一般向けに関心を引き起こすだけでなく、それらを学術的に取り扱う人材の育成が必要である。これまでの事業でも当研究所が持つ鳥学に関する知識・技術を伝える講習会、実習を重ねて実施してきたが、当該学問分野の継続と興隆のために、講習会や実習の価値はますます高まるであろう。鳥学や関連する学術資料を扱う研究分野の若手研究者、担い手を指導できるよう、本事業では講習会や実習を充実させるとともに、当研究所が持つ知識・技術を次世代へ伝えるために動画等を用いて記録し、またそれらを講習会・実習用に活用しフィードバックする。これらの事業により、これまでの事業内容を確実に次世代へ伝える基盤を整備する。

3. 研究事業期間を通して行う研究事業の内容

本事業の研究項目は、これまでの事業から再編し、各種資料群の収集管理を行う「収集管理班」、既成のデータ公開を継続し、普及啓発活動を行う「公開班」、講習会や実習及びそれらに必要な動画などの収集管理を通して次世代を育てる「人材育成班」の3項目とする。また、これらの事業の進捗状況の点検と全体総括を行う「総括班」を設ける。

(1) 収集管理班：これまでの事業で一貫して行ってきた資料群の収集と管理を行う。

野外採集、寄贈受け入れ、国内外の博物館等との交換、購入等により、標本や組織サンプル(肉片・血液・羽毛等)、図書、及び鳥学資料(鳥類の写真や音声記録、鳥類学者による手紙やノート類、鳥類図譜の

原画や鳥籠といった文化資料等)を収集する。また、所蔵する標本に付随する組織サンプルや羽毛などを活用して、DNA塩基配列で種の同定を行うためのDNAバーコードデータを収集する。さらに、鳥の体内に含まれる窒素や炭素の安定同位体からその鳥の食性指標を与える安定同位体比データの収集に取り組む。

収集された鳥学資料に管理番号を与えて情報をデジタル化し、標本庫・冷凍庫・書庫などに配架する。これらの資料の劣化を防ぐため、温湿度管理や清掃などの日常的管理業務に従事する。

標本、組織サンプル、図書及び鳥学資料の利用を希望する研究者をサポートする。

(2) 公開班：一般向け、学術向けを問わず、資料群へのアクセスを容易にする公開を行う。

標本については『標本データベース』*¹で、標本の基礎的な情報である採集地、採集日などとともに、該当標本とそのラベルの写真を配信する。また、標本などから得られるデータとして、X線CT画像と走査電子顕微鏡画像についても標本データベースを通じて公開する。標本データベースで表記している和名や分類体系は、『世界鳥類和名辞典』(山階, 1986)に従っているが、分類学の進展に伴って最新の学説に合わせることが求められているため、改訂作業を行い、新和名や新しい分類体系を提唱する。組織サンプルの収蔵状況を当研究所ウェブサイトで公開する*²。図書及び鳥学資料については、統合データベース*³で収蔵状況を公開する。DNAバーコードデータを『Barcode of Life Data System (BOLD)』*⁴で公開する。安定同位体比データを当研究所ウェブサイトで公開する。

学術雑誌『山階鳥類学雑誌』を年2回発行する。

山階鳥研のウェブサイトを改良し、動画などを通じて本事業により得られた資料の紹介とデータベースの利用を提示する。

鳥学に関する一般向けセミナーを開催する。一般的な質問の窓口を開設する。

(3) 人材育成班：次世代育成のために知識・技術の収集管理や講習会、実習等を行う。

野外で鳥類を安全に捕獲し取り扱う技術、解剖や剥製を作製する技術の映像記録を収集する。

捕獲未経験者へ基礎知識を提供する講習会を行う。かすみ網を用いた小型陸鳥、海鳥コロニー、大型水禽類、データロガー等の装着手法での捕獲調査実習を行う。鳥類の解剖や標本作製の実習を行う。これらの実習についても映像資料を収集し、技術継承のために保管する。また、これらの映像資料については、当該学術分野の大学講義などでの活用を想定して講習用に編集する。

*¹ <https://decochan.net>

*² https://www.yamashina.or.jp/hp/hyohon_tosho/soshiki_sample.html

*³ 現在は『図書・文化資料データベース』として右記URLで公開中 <https://jmapps.ne.jp/zhycrkj/>

*⁴ <https://v4.boldsystems.org/>

【採択時の審査結果の所見およびその対応策】

……所見……

貴団体は、鳥類の標本や関連文献の大規模なコレクションを有し、その保全と普及に取り組んでおり、世界的にも類を見ない。これらの資料は長年にわたり蓄積されてきたものであり、適切な保管と資料の充実、そして継続することが、鳥類学の研究基盤を強化する上で非常に重要である。事業の目標は、標本やデータの充実、デジタル化と保存、情報の公開、他の組織との協力や人材育成に焦点を当てた適切なものであると評価される。大部分の事業は他の競争的研究費にはなじみにくく、特定奨励費による支援が妥当であると考えられる。

一方、本特定奨励費と他の競争的研究費で実施する事業の区別が不明瞭な事業も一部に見受けられることから、実施項目ごとの区分けと位置付けを意識した運営が望まれる。更なる長期の研究基盤の拡充に向けて、鳥類に関わるデータの公開と人材育成計画(若手研究者)のより一層の工夫を期待したい。

……………

DNAバーコードデータと安定同位体比データは公開して広く共有されることを意図して収集されている。すなわち、特定分類群に集中してデータ収集するのではなく、できるだけ多くの分類群を含んだデータ収集に努めている。こうすることで、前者であれば種同定により貢献することを意図しているし、後者では栄養段階の違いと安定同位体比との関係を明示して研究促進する効果がある。当事業計画では、

作業内容に基づく研究項目分けをしたため、データの収集過程とデータの公開を別の研究項目としたが、データの収集から公開に至るまで一貫して広く利用されることを意図している。安定同位体比データは未公開ではあるが、より視覚化されたデータ公開かつダウンロードが容易なプラットフォームを開発した。

人材育成班の講習会・実習で使用される機器や消耗品の一部は野外でのデータ収集に利用可能なものであるが、実習において代替として模造品を使っても実情にあった作業とはならず、効果は薄いため、実際に利用される機器等を用いている（あるいは効果的な代替品の入手の方が困難）。また、この過程で収集されるデータは、その解釈や解析も含めて講習会・実習の対象としている。講習会の効果は即時には現れないが、対象として大学生や大学院生、あるいは学芸員などを実習生としており、講習会開催場所も要望の多い地方などに出向いて行うことで効果を高めている。

4-1. 令和6年度の研究事業の実施体制

研究事業の内容	研究者氏名		所要額 (千円)
	研究責任者	研究者及び補助者	
(0)総括班	小川 博（所長）	遠藤秀紀（東京大学教授） 尾崎清明（山階鳥類研究所副所長） 高木昌興（北海道大学教授） 長谷川雅美（東邦大学名誉教授） 林 良博（国立科学博物館顧問） 真鍋 真（国立科学博物館副館長） 美濃導彦（理化学研究所情報統合本部ガーディアンロボットプロジェクトプロジェクトリーダー） 綿貫 豊（北海道大学名誉教授） 高橋敏之（山階鳥類研究所所員・経理事務担当）	23,929
(1)収集管理班	鶴見みや古（文化資料ディレクター・収集管理班の総括）	浅井芝樹（組織サンプル担当） 岩見恭子（標本／同位体データ／閲覧担当） 小林さやか（標本／鳥学資料／閲覧担当） 齋藤武馬（組織サンプル／DNAバーコード担当） 鶴見みや古（図書／鳥学資料／閲覧担当） 富田直樹（同位体データ担当）	19,492
(2)公開班	浅井芝樹（研究員・公開班の総括）	浅井芝樹（組織サンプル／雑誌刊行担当） 小林さやか（図書・鳥学資料データベース担当） 齋藤武馬（DNAバーコード担当） 澤 祐介（ウェブサイト／一般向け解説担当） 神保理香（ウェブサイト／一般向けセミナー担当） 千田万里子（一般向け解説担当） 鶴見みや古（図書・鳥学資料データベース担当） 富田直樹（同位体データ担当） 平岡 考（ウェブサイト／一般向けセミナー担当） 森本 元（電顕画像／一般向け解説担当） 山岡容子（ウェブサイト／一般向けセミナー担当） 山崎剛史（標本データベース／和名整備／CT画像担当）	8,549
(3)人材育成班	水田 拓（自然誌・保全研究ディレクター・人材育成班の総括）	岩見恭子（講習会担当） 澤 祐介（映像資料／講習会担当） 千田万里子（映像資料／講習会担当） 富田直樹（講習会担当） 仲村 昇（講習会担当） 水田 拓（映像資料担当） 森本 元（講習会担当） 油田照秋（講習会担当）	4,047

4-2. 令和6年度の進展状況及び主な成果

(1) 収集管理班

【事業計画】

【標本・組織サンプル等】標本・組織サンプルの収集：遺体及び野外で捕獲した鳥体や血液、羽毛などの組織サンプルを受け入れる。これらに管理番号を与え、種名・性別・齢・採集地名・採集年月日・採集者名・採集方法・標本の種類等の情報を管理用データベースに登録する。標本の管理：新規に寄贈、作製された各種標本について必要な場合は標本庫に入れる前に殺虫処理をする。標本番号を付与し、写真撮影を行って標本の状態を記録する。その後、標本庫内の収蔵棚に配架し、収蔵場所番号を記録する。500点の標本を配架する。組織サンプルの管理：新規で受け入れた組織や、鳥体から切り出した組織をサンプルの状態に合わせ、冷蔵庫、冷凍庫などに配架し、保管場所を記録する。400点の組織サンプルを配架する。DNAバーコードデータ：分析が比較的容易なDNAバーコード領域の塩基配列をすべての生物について決定してデータベース化することにより、生物種を正確に同定できるシステムの構築を目指す国際プロジェクト Barcode of Lifeに協力する。日本産鳥類をおもな対象として、70点のデータを揃える。安定同位体比データ：炭素と窒素の安定同位体比データを収集する。標本や冷凍遺体の羽毛や組織を用い、分析は大学共同利用施設などで行う。日本産鳥類をおもな対象として、50点のデータを収集する。

【図書及び鳥学資料】購入、寄贈、他機関との交換等によって収集し、新規に収集した図書や未整理の鳥学資料について管理番号を与え、ラベルの装着等を行う。管理番号・資料名などの情報をデジタル化する。鳥学資料の写真撮影を行い、状態を記録する。図書の場合、重複する資料の譲渡・交換・廃棄等を行う。これら一連の作業を終えた図書及び鳥学資料を書庫などに配架する。図書資料1,000点、鳥学資料700点について、これらの作業を行う。また、図書及び鳥学資料について、破損などが発見された場合には修理を行う。

【資料の保管管理】標本庫・書庫については、常時、温湿度管理、害虫・カビの発生状況のモニタリングと、年1回程度の殺虫剤の噴霧を行う。害虫やカビの発生時は速やかな除去、清掃を行う。

【利用者対応】国内外の研究者から資料の利用申請を随時受け付け（閲覧または貸出）、速やかに計画を審査し、適切と判断される場合には、利用の許可を与える。また、資料の利用に伴って生じる処理を行う（閲覧の場合は資料の準備、利用状況の監視、後片付け等、貸出の場合は借用書の取り交わし、梱包・発送、返却物の殺虫・殺カビ処理等）。

【進展状況及び主な成果】

【標本・組織サンプル等】標本・組織サンプルの収集：収集した遺体からの新規作成や寄贈受け入れにより2,487点の標本を入手した。野外採取や冷凍保管遺体からの採取、およびまとまった寄贈により、2,085個体分の組織サンプルあるいはDNAサンプルを入手した。これら標本・組織サンプルの情報を管理用データベースに登録した。標本の管理：新規に入手した標本700点について必要な処理を行った上で、標本番号の付与、写真撮影、標本状態の記録を行い、収蔵庫に配架した。組織サンプルの管理：DNA溶液を含む組織サンプル2,626点について、状態に合わせて配架した。過年度の登録漏れを今年度は効率的に処理できたため登録数が多くなった。DNAバーコードデータ：70点のデータを収集した。安定同位体比データ：50点のデータを収集した。

【図書及び鳥学資料】購入や寄贈によって新規収集した図書や、未整理の鳥学資料に管理番号を与えるなどの処理を行った上で情報をデジタル化した。図書については重複図書の譲渡・交換・廃棄等を行った上で1,856冊を、鳥学資料については写真撮影と状態の記録をした上で1,229点を配架した。在野の鳥学研究者2名のフィールドノートおよび調査データ（デジタル）の寄贈を受けた。雑誌96冊について合本製本を行うとともに、破損・劣化が見られた513点の図書について修理および保存処理を行った。

【資料の保管管理】温湿度管理、害虫・カビの発生状況のモニタリングを行い、殺虫剤の噴霧を1回行った。

【利用者対応】標本閲覧21件（のべ29人）を受け入れた。標本貸出3件（のべ10点）に対応した。組織サンプルは5件の提供申請を審査し、2件提供した。図書閲覧14件（のべ14人）を受け入れた。その他、資料貸出3件（135点）に対応した。

(2) 公開班

【事業計画】

【資料群の公開】標本：ウェブサイト『標本データベース』を運営して500点の標本データ（標本の種類（剥製・骨格・卵・巣等）、標本番号、種名、性別、採集地名、採集年月日等のテキスト情報、標本写真、標本ラベル写真）を追加し、適宜修正などを行う。鳥体内部構造のX線CT画像：標本をX線CTシステム（リース品）で100点撮影し、標本データベースに追加する。羽毛の走査電子顕微鏡画像：骨格標本作製時に除去される羽毛を活用して75点のデータを作成し、標本データベースに追加する。東京大学総合研究博物館の機材を借りて撮影する。和名の整備：『世界鳥類和名辞典』を最新の分類学に合わせて改訂した内容を報文にまとめ、『山階鳥類学雑誌』上で公表する。組織サンプル：当研究所ウェブサイトの『組織サンプルの提供』に収蔵状況を示すエクセルファイルをアップロードする（更新頻度年1回）。図書及び鳥学資料：所蔵図書と鳥学資料の両方を検索できる統合データベースを運営し、1,500点の書誌情報と100点の鳥学資料を公開する。DNAバーコード：ウェブサイト『Barcode of Life Data System (BOLD)』に70点のデータを追加し、公開する。安定同位体比データ：当研究所のウェブサイトで50点のデータを公開する。

公開された資料群の利用申請については（1）収集管理班で対応する。

【学術誌の刊行】学術雑誌『山階鳥類学雑誌』を2回刊行する。

【ウェブサイトの整備】山階鳥研に所蔵される資料群を紹介するための映像を撮影し、それらの一般向け解説の作成やその他の動画素材を準備する。また、データベースへアクセスしやすくするウェブサイト構成について検討し、随時変更する。

【一般向けセミナー・解説等】我孫子市鳥の博物館研究者とともに実施している一般向けオンラインセミナーにて8回講演する。また、我孫子市が中心となって11月上旬に開催されるジャパンバードフェスティバルにおいても、同様のセミナーを行う。鳥学に関してよくある一般からの質問を受け付ける窓口を開設する。野外調査実習を実施する教育機関等で活用可能な教材をウェブサイトなどで公開する。

【進展状況及び主な成果】

【資料群の公開】標本：ウェブサイト『標本データベース』を運営した。今年度は寄贈された羽毛コレクションの処理が進んだため、これらも標本公開のシステムに合わせて総数1,221点の標本データを追加した。閲覧者数はのべ3,119,523人であった。S-Netへ3,000件の標本情報を提供した。鳥体内部構造のX線CT画像：37個体237点のデータを標本データベースに追加した。羽毛の走査電子顕微鏡画像：55点のデータを作成し、標本データベースに追加した。今年度は目標を達成できなかったが、事業計画の3年間のうちに3年分の目標である225点は公開できる見込みである。和名の整備：ヨタカ類の新しい種和名を整理した報文を『山階鳥類学雑誌』56巻2号に掲載した。アマツバメ目の新しい属と種の和名についての報文を準備中である。組織サンプル：提供可能な組織サンプル14,322個体分のリストをアップロードした。図書及び鳥学資料：所蔵図書と鳥学資料を統合したデータベース『図書・文化資料データベース』を運営し、図書1,727点と鳥学資料211点のデータを追加した。閲覧者数はのべ397人であった。DNAバーコード：『BOLD System』に70点のデータを追加公開した。安定同位体比データ：令和6年度は公開用データベースの作成を優先し、データベースの基本構造が完成した。データの公開は令和8年度にまとめて行うこととする。

【学術誌の刊行】山階鳥類学雑誌56巻1号、2号を刊行した。J-Stageで公開された電子版へのアクセス数は29,665件であった。

【ウェブサイトの整備】山階鳥研が資料保管を担っていることを紹介する一般向け動画、標本作製や標本の管理について解説した動画を作成し、公開した。また、データロガー装着実習と得られたロガーデータの活用に関する講義の動画を公開した。

【一般向けセミナー・解説等】我孫子市鳥の博物館とともに実施している一般向けオンラインセミナーで8回講演した。11月2、3日に開催されたジャパンバードフェスティバルではのべ13講演を実施した。一般からの質問326件に対応した。「捕獲未経験者への基礎知識の提供をテーマにした講習会」で使用されている教材資料の公開に際しては、野外での濫用が懸念される技術等の公開制限を検討した。

(3) 人材育成班

【事業計画】

【映像資料の収集】鳥の捕獲技術を記録するため、捕獲現場での作業時にさまざまな動画映像を撮影する。下記の講習会・実習教材としての映像資料も収集する。

【講習会・実習】捕獲未経験者への基礎知識の提供をテーマにした講習会を京都府で1回開催するとともに、開催要望についての調査を行う。かすみ網による小型陸鳥の捕獲をテーマにした野外実習を福島県にて6回、海鳥コロニーでの捕獲をテーマにした野外実習を青森県、伊豆諸島、京都府で各1回、大型水禽類（ガン類）の捕獲をテーマにした野外実習を北海道で1回、データロガーや発信器を装着する手法の講習を千葉県で1回開催する。なお、小型陸鳥と海鳥コロニー（青森県）の野外実習は、平成30年以降に特定奨励費事業で実施された調査地と方法で実施される。したがって、この野外実習で得られるデータは、繁殖モニタリングデータとしての価値も持ち、すべて令和8年度中に『山階鳥類学雑誌』で報告される。鳥類標本の作製技術を伝える実習は、当研究所では随時開催、地方にて年1回開催する。

【進展状況及び主な成果】

【映像資料の収集】捕獲現場での作業記録として、新潟県福島潟において小鳥類の捕獲作業を撮影した。また、講習会・実習教材として秋田県大潟村においてキャノンネットの設置方法、北海道函館市においてくくり罠による水鳥の捕獲方法についての映像資料を収集した。

【講習会・実習】捕獲未経験者への基礎知識の提供をテーマにした講習会を11月30日～12月1日に京都市動物園にて開催し、13人が受講した。同講習会については地方での要望が多く、当研究所と連携協定を締結している京都市動物園との共催とした。また、9月24日にセンサス・捕獲技術に関する講演を国際基督教大学で開催した。かすみ網による小型陸鳥の捕獲をテーマにした野外実習を福島県にて6回開催し、のべ22人が受講した。海鳥コロニーでの捕獲をテーマにした野外実習を青森県、伊豆諸島、京都府で各1回開催し、のべ14人が受講した。大型水禽類（ガン類）の捕獲をテーマにした野外実習を北海道宮島沼、野付湾、宮城県伊豆沼で各1回開催し、のべ15人が受講した。データロガーや発信器を装着する手法の講習会・実習を当研究所、滋賀県、宮城県で各1回開催し、のべ17人が受講した。鳥類標本の作製技術を伝える実習を、6月9～12日に森林総合研究所九州支所において34人を対象に、9月17日に山階鳥研で10人を対象に、12月22日に相模市立博物館で10人を対象に開催した。

5-1. 経費の使用状況（単位：円）

研究事業の内容	合計	費目別内訳			
		物品費	旅費	人件費・謝金	その他
総括班	23,928,790	39,040	331,939	23,367,621	190,190
収集管理班	19,492,322	6,786,138	69,168	9,045,980	3,591,036
公開班	8,548,848	831,563	25,806	1,979,220	5,712,259
人材育成班	4,047,192	1,465,676	1,835,773	272,300	473,443
合計	56,017,152	9,122,417	2,262,686	34,665,121	9,966,928

5－2. 研究項目ごとの明細（単位：円）

研究項目名			
物品費	品名	数量	金額
	スリッパ	40 足	32,120
	ホッチキス	1 台	6,920
	計		39,040
旅費	事項（積算内訳）	数量	金額
	成果発表会 旅費	44 名	295,743
	意見交換会 旅費	19 名	26,500
	成果発表会 下見・打合せ	4 名	9,696
	計		331,939
人件費・謝金	事項（積算内訳）	数量	金額
	給料 研究員・専門員	14 名	20,813,525
	給料 事務	1 名	2,023,730
	社会保険料		510,366
	成果発表会 発表者謝金	2 名	20,000
	計		23,367,621
その他	品名	数量	金額
	成果発表会 会場使用料		61,600
	成果発表会 懇親会 食事代		42,480
	成果発表会 テープ起こし作業代		40,920
	意見交換会 テープ起こし作業代		23,650
	成果発表会 資料等送料		17,480
	意見交換会 資料等送料		4,060
	計		190,190

研究項目名		収集管理班	
物品費	品名	数量	金額
	雑誌購読料	22誌	1,546,718
	標本 消耗品		1,396,823
	図書 消耗品		1,027,586
	エアコン	2台	990,000
	超純粋製造装置	一式	577,951
	会議用スタッピングテーブル	8台	313,500
	パソコン	3台	312,884
	図書 単行本	25冊	177,656
	定温乾燥機	1台	155,430
	ソフトウェア	7個	144,040
	防塵・防水型中量級天びん	1基	143,550
	計		6,786,138
旅費	事項（積算内訳）	数量	金額
	資料受取		47,253
	近郊出張		21,915
	計		69,168
人件費・謝金	事項（積算内訳）	数量	金額
	臨時職員謝金 図書	7名	3,742,380
	臨時職員謝金 標本	5名	1,991,880
	臨時職員謝金 標本作製	4名	1,767,300
	臨時職員謝金 受入データベース	2名	1,359,620
	臨時職員謝金 行政手続き	1名	184,800
	計		9,045,980
その他	品名	数量	金額
	仮剥製標本作製	129体	1,202,800
	廃棄物処理		495,619
	エコミュアーFTドライ防虫施工		363,000
	雑誌等合本製本	104冊	356,400
	標本燻蒸処理作業		297,000
	通信運搬費		288,871
	皮標本製作依頼	4体	206,800
	シーケンスレンタル解析		81,840
	Dropbox利用料		75,240
	資料保管料		66,000
	ハンドル式移動棚 ハンドル交換		60,500
	同位体比分析		58,564
	データ保管サービス		27,401
	会議費		11,001
	計		3,591,036

研究項目名	公開班		
物品費	品名	数量	金額
	ノートパソコン	1台	331,600
	ミラーレス一眼レフカメラ	1台	178,200
	消耗品		114,784
	ソフトウェア	1個	78,982
	ソフトウェア サブスクリプション	4個	78,197
	iPad	1台	49,800
	計		831,563
旅費	事項（積算内訳）	数量	金額
	電子顕微鏡撮影		25,806
	計		25,806
人件費・謝金	事項（積算内訳）	数量	金額
	臨時職員謝金 和名整備	2名	904,200
	臨時職員謝金 標本データベースの公開	1名	665,820
	臨時職員謝金 資料公開用データ作成	1名	231,000
	臨時職員謝金 足環報告遺体寄贈依頼	1名	151,800
	臨時職員謝金 CT撮影	1名	26,400
	計		1,979,220
その他	品名	数量	金額
	X線CT 予防保守契約		1,540,000
	山階鳥類学雑誌 印刷費		1,226,064
	X線CTスキャンリース料		996,600
	図書整備業務		542,850
	鳥類標本検索システムの拡張・維持・管理・更新		500,000
	収蔵品管理システム利用料		396,000
	山階鳥学誌 校正業務		203,500
	山階鳥類学雑誌 発送費		145,834
	山階鳥類学雑誌 封筒代		72,600
	山階鳥類学雑誌 英文校閲料		57,131
	Dropbox利用料		31,680
	計		5,712,259

研究項目名	人材育成班		
物品費	品名	数量	金額
	発信器・データロガー	各3台	419,160
	ノートパソコン	1台	224,800
	調査実習 ガソリン代		198,316
	かすみ網	10枚	190,410
	データロガー受信機	1台	167,860
	ネットワーク機器		151,521
	調査実習 消耗品		113,609
	計		1,465,676
旅費	事項（積算内訳）	数量	金額
	調査・実習 旅費（捕獲技術実習）		763,000
	調査・実習 旅費（映像資料の収集）		381,203
	調査・実習 旅費（陸島実習）		374,970
	調査・実習 旅費（海島実習）		209,780
	実習・講習会 旅費（剥製実習）		106,820
	計		1,835,773
人件費・謝金	事項（積算内訳）	数量	金額
	臨時職員謝金 データ整理	2名	132,000
	調査・実習 協力者 謝金	4名	121,600
	山階鳥学セミナー 謝金	2名	18,700
	計		272,300
その他	品名	数量	金額
	調査・実習 レンタカー代		141,768
	調査・実習 通信運搬費		137,648
	発信器装着実習用剥製	2体	104,000
	調査・実習 教材印刷費		38,500
	調査・実習 会議費		23,647
	Dropbox利用料		15,840
	申請手数料等		7,000
	通信機器レンタル料		5,040
	計		473,443

6. 研究事業の成果の公表状況

(1) 収集管理班

【論文】

本班は資料類のさらなる収集に努め、保有する資料の劣化・散逸を防ぎ、その利用を希望する研究者や研究機関をサポートする活動を行っている。資料や設備の利用者により、令和6年度に19編の論文が出版された。

1. 姉崎悟・本名百竹 (2024) トカラ列島宝島に出現したズグロミゾゴイ *Gorsachius melanolophus*. 日本鳥学会誌 73 (1) : 103-106.
2. Andreyenkova NG, Hong SY, Lin HS, Iwami Y, Kirillin RA, Literák I, Zhimulef IF, Karyakin IV (2024) Genetic relationships of populations of the Black Kite *Milvus migrans* (Accipitriformes: Accipitridae) in the east of its range in Asia and Australia. *Zootaxa* 5523 (1) : 83-99.
3. Arima H, Sugawa H, Sawa Y (2025) Geographic variations in body size of the Black-headed Gull *Chroicocephalus ridibundus*. *Ornithological Science*: 27-37.

4. 福田道雄 (2024) 白瀬南極探検隊に記録されたペンギン. 山階鳥類学雑誌 56 (1) : 1-32.
5. Gunji M, Taewcharoen N, Yamada F, Sherratt E (2025) Does fast running limit numerical variability of the vertebral column in rabbits and hares (Leporidae: Lagomorpha) ? Royal Society Open Science 12 (1) : 241813.
6. Hyun J (2024) Science as a family affair: Won Pyong-Oh and the transwar origins of South Korean ornithology. International Journal of Korean History 29 (1) : 5-51.
7. 今村知子・齋藤武馬・小田谷嘉弥・齊藤安行 (2024) 千葉県柏市で死体修得された黒い下嘴を持つニシオジロビタキ *Ficedula parva* について. 山階鳥類学雑誌 57 (2) : 222-229.
8. Jiang Z, Zang W, Ericson PGP, Gang SG, Wu S, Feng S, Drovetski SV, Liu G, Zhang D, Saitoh T, Alström P, Edwards SV, Lei F, Qu Y (2024) Gene flow and an anomaly zone complicate phylogenomic inference in a rapidly radiated avian family (Prunellidae) . BMC Biology: 22-49.
9. Kearns AM, Campana MG, Slikas B, Berry L, Saitoh T, Graves GR, Cibois A, Fleischer RC (2024) Untangling the colonization history of the Australo-Pacific reed warblers, one of the world's great island radiations. Evolution 78 (12) : 1900-1915.
10. Kishimoto N, Wada D, Tamayama M, Iwami Y, Tomita N, Ikeda T, Tanahashi Y, Katagiri K (2024) Evaluation of wind tunnel test results of taxidermy Black-tailed Gull (*Larus crassirostris*) . Proceedings of 34rd Congress of the International Council of the Aeronautical Sciences.
11. Kobayashi S (2024) Bird specimens transferred from overseas museums to national museums of Japan in the 1800s: The Tokyo Imperial Household Museum Collection. Biodiversity Information Science and Standards 8: e134958.
12. 仲村昇・油田照秋・千田万里子・水田拓 (2024) 2021～2023年に福島県で行われた繁殖鳥モニタリング (MAPS) 調査. 山階鳥類学雑誌 56 (1) : 83-95.
13. 成田章・富田直樹 (2024) 2023年の八戸市大久喜の弁天島におけるウミネコの繁殖状況. 青森自然誌研究 29: 125-128.
14. 西田澄子・鶴見みや古・北村亘 (2025) 大正・昭和初期の外国原産鳥類の飼養状況と野外逸出状況からみた外来種定着リスク. 日本鳥学会誌 74 (1) : 45-54.
15. Rancilhac L, Enbody ED, Harris R, Saitoh T, Irestedt M, Liu Y, Lei F, Andersson L, Alström P (2024) Introgression underlies phylogenetic uncertainty but not parallel plumage evolution in a recent songbird radiation. Systematic Biology 73 (1) : 12-25.
16. 齋藤武馬 (2024) 北海道におけるオオムシクイ *Phylloscopus examinandus* の繁殖分布調査. 山階鳥類学雑誌 56 (2) : 194-208.
17. 先崎愛子・先崎啓究・小田谷嘉弥・齊藤安行 (2024) 新潟県岩船郡粟島におけるシベリアイワツバメ *Delichon lagopodum* の観察および死体拾得記録. 日本鳥学会誌 73 (2) : 253-258.
18. 富田直樹・成田章 (2024) ウミネコ繁殖地蕪島における2012年から2023年の繁殖モニタリング. 山階鳥類学雑誌 56 (1) : 78-82.
19. 山崎剛史・亀谷辰朗・今村知子 (2024) ヨタカ類に近縁な鳥類の新しい属と種の和名. 山階鳥類学雑誌 57 (2) : 236-243.

【一般向け解説記事 (雑誌など)】

令和6年度中に4編の一般向け記事が出版された。

20. 小林さやか (2024) 企画展「山階芳麿博士の作った図鑑」の紹介. 日本鳥学会鳥学通信 2024-08-14. <https://ornithology.jp/newsletter/articles/1451/>.
21. 齋藤武馬 (2024) 標す・識る・調べる・查べる～足環とともに100年. 06新分類や初記録につながる標識調査. BIRDER 38 (6) : 44-45.
22. 齋藤武馬 (2024) 所員エッセー 高山での鳥類調査の苦労と楽しみ. 山階鳥研NEWS 36 (4) : 5.
23. 鶴見みや古 (2024) 企画展「山階芳麿博士の作った図鑑」山階鳥研NEWS 36 (5) : 4-5.

【書籍】

令和6年度中に3編の書籍が出版された。

24. 我孫子市鳥の博物館・山階鳥類研究所 (2025) 第93回企画展図録「山階芳麿博士の作った図鑑」—『日本の鳥類と其の生態』ができるまで—. 我孫子市鳥の博物館, 我孫子.
25. 日本鳥学会 (2024) 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京. (編集委員: 齋藤武馬・平岡考・山崎剛史)

26. 山階鳥類研究所 (2024) 足環をつけた鳥が教えてくれること. 山と溪谷社, 東京.

【学会発表等】

令和6年度中に8件の学会発表があった。

27. 石川弘樹・對比地孝亘・岩見恭子 (2024) 現生鳥類の未成熟個体の骨形態と孵化後の成長に伴う骨化・癒合状態の変化. 日本鳥学会2024年度大会 (9月13日～16日, 東京大学).
28. 岩見恭子 (2024) 大型海鳥の剥製を使った風洞実験. キヤノン財団リユニオン2024 (12月6日, AP東京丸の内).
29. 岩見恭子・富田直樹・兵藤不二夫 (2024) 鳥類標本に付随する種横断的な安定同位体比のデータベース. 日本鳥学会2024年度大会 (9月13日～16日, 東京大学).
30. 加藤ゆき・小林さやか・岩見恭子 (2024) 第6回標本集会「博物館施設の標本作製の現状と課題」. 日本鳥学会2024年度大会 (9月13日～16日, 東京大学), 自由集会.
31. Kobayashi S (2024) Bird specimens transferred from overseas museums to national museums of Japan in the 1800s: the Tokyo Imperial Household Museum collection. SPNHC & TDWG Joint Conference (2-6 September 2024, Okinawa Convention Center), Poster session.
32. 小林さやか (2024) 1800年代に日本の国立博物館が海外から入手した鳥類標本群. 日本鳥学会2024年度大会 (9月13日～16日, 東京大学), ポスター発表.
33. 齋藤武馬 (2024) オオムシクイは北海道のどこで繁殖するのか?. 日本鳥学会2024年度大会 (9月13日～16日, 東京大学).
34. 吉田成 (2024) 写真の誕生と収集・展示・保存. アート・ドキュメンテーション学会 (6月15日, 東京都写真美術館).

【一般向け講演会】

令和6年度中に3つの講演会が開催された。

35. 岩見恭子 (2024) 鳥類の標本学ー標本収集とその意義ー. 朝日カルチャー (2024年12月20日, 朝日カルチャーセンター新宿).
36. 小林さやか (2024) 背景を知れば面白い標本の話. 特定賛助会員の集い (2024年5月30日).
37. 小林さやか (2024) 背景を知るとおもしろい標本の話. 毎日新聞企業人大学 (2024年11月21日, ホテルグリントワー幕張).

【展示会等への協力】

令和6年度中に5つの展示会が開催された。

38. 富士見町高原のミュージアム展示会「こんなふうに、鳥と人は暮らしてきた～鳥獣の歴史と、現在につながる鳥類調査の役割～」(2025年2月8日～3月23日). 堀内讃位狩猟写真12点.
39. 我孫子市鳥の博物館第93回企画展 (山階鳥研共催)「山階芳麿博士が作った図鑑ー『日本の鳥類と其の生態』ができるまで」(2024年7月13日～11月4日). 標本、書籍ほか123点.
40. 東京農業大学「食と農」の博物館企画展「南極飯!」(2024年10月18日～2025年3月29日, 山階鳥研特別協力). 標本1点.
41. 東京大学総合研究博物館インターメディアテク特別展示「in Vitro? in Vivo! ー立木義浩×東京大学」(2024年10月26日～2025年1月19日). 標本2点の撮影.
42. 国立科学博物館特別展「鳥ーゲノム解析が解き明かす新しい鳥類の系統ー」(2024年11月2日～2025年2月24日, 山階鳥研後援). 標本3点ほか.

(2) 公開班

ウェブサイト『標本データベース』は、当研究所が所蔵する標本と当事業により整備された我孫子市鳥の博物館の標本82,130点について、種名・性別・採集地名・採集年月日・採集者等に関するテキスト情報と、標本画像、標本ラベル画像を配信している。また、鳥体内部構造のX線CT画像 (1,227標本に付随)、羽毛の走査電子顕微鏡画像 (70標本に付随)、羽色の紫外線画像 (603標本に付随) がダウンロードできる。いずれも非営利の場合、出典を明記するという条件を満たすだけで誰もが自由に使用できる。このサイトは研究や普及啓発活動だけでなく、教育や創作活動をもサポートするツールとして活用されている。令和6年度の閲覧者はのべ3,119,523人に上った。

なお、『標本データベース』から配信中の上記テキスト情報は、生物の分布情報の整備と全世界的な流通促進を目指す国際プロジェクトである『GBIF (Global Biodiversity Information Facility)』のデータベースでも公開しているほか、国立科学博物館が運営し、日本国内の生物標本の所在地情報の整備を

目指すウェブサイト『サイエンスミュージアムネット』でも閲覧できる。

ウェブサイト『組織サンプルの利用』では、研究への提供が可能な組織サンプル14,322点について、種名、採集地名、採集年月日、性別の情報をまとめたエクセルファイルが公開されている。ウェブサイト『図書・文化資料データベース』では、以前『蔵書検索システム』で公開されていた当研究所所蔵の蔵書に加えて、当事業で整備された資料（現在はおもに木口木版版木）の情報、合わせて41,895点が公開されている。

ウェブサイト『Barcode of Life Data System (BOLD)』では、当研究所が提供したDNAバーコードデータ373種1,370点が公開されている。

この他、我孫子市鳥の博物館企画展への協力では（収集管理班成果39）、我孫子市によるオンラインでの展示内容紹介にも協力した。https://www.youtube.com/watch?v=O6Iez_Zo64E

(3) 人材育成班

当事業項目では、講習会・実習の開催とそれを補完する映像資料の収集と編集を行っている。したがって公表状況に沿った成果はないが、令和6年度の講習会・実習開催は総計20回、開催地は13箇所、参加のべ人数は135人となった。この活動による当該分野への貢献度は極めて大きいと考えているが、数年でその成果を示すことは難しい。この研究項目を立てる以前から特定奨励費事業により講習会を開いてきたが、捕獲未経験者に基礎知識を提供する講習会に参加してその後学生として研究を続けている水村春香氏に、令和5年度の成果発表会で継続中の研究をご発表いただいた。この事業の継続により、このような例がますます増えると期待される。

7. 研究事業を推進する上での問題点と対応策及び今後の研究事業の推進方策

【事業を推進する上での問題点と対応策】

本年度事業では、鳥学を支える資料の収集整備に加えて、これらの事業を支援する動機づけに繋がる普及啓発活動や、事業を継続できる人材、あるいはこれらの資料を研究利用できる人材を育成して事業継承するための講習会・実習の開催を加えたことが特徴である。また、当研究所の高度な鳥類捕獲技術を継承するために、その映像収集や講習会・実習の比重も大きくした。これらの事業が重要であることに疑いはないが、知識や技術の提供先を効率よく開拓できているかどうかは検討の余地が大きい。単純なところでは講習会・実習の開催案内はそれを要する人にうまく届いているかどうかということである。

一般向け普及啓発活動についても、どのような媒体を使えば効率よく伝わるのかということは、未だ試行錯誤の段階である。昨今では、インターネットによる情報発信がもっとも効率がよいと考えており、それに即して動画収集と公開を事業導入し、その端緒は今年度を実施した。しかしながら、情報提供に使用している山階鳥研ウェブサイトは構築されてから年月が経ち、情報過多でリンク先がわかりにくい状況になっているため、アクセスしやすいとは言い難いといった問題がある。

【今後の研究事業の推進方策】

講習会・実習の開催情報と参加を呼びかける方法としてはインターネットを介することが最も効果が高い。学生をはじめとする多くの潜在的受講者は、必要な情報をインターネット検索等で収集しているのは間違いないであろう。そこで、必要とする情報にアクセスしやすいようなウェブサイトのデザインを検討し、適宜変更する。また、潜在的受講者の多くは学生と考えられるので、大学などの研究機関と情報共有しながら、それらの機関の要望に応じた開催を検討する。

普及啓発活動の視点でもインターネット上で見つけやすく、効果のある情報提供が重要であろう。上記のウェブサイトデザインの変更は普及啓発活動の観点でも有用である。普及啓発活動では、過剰な文字情報よりも簡易な動画再生の方が、関連分野に関心のある層の開拓に効果があるだろう。どのような動画がより効果的かを判断するのは難しいため、当面の対応としては的を絞った内容の簡潔なものを多く作成して公開する方向とする。一度作成したものを改善できる余地があれば、それも積極的に行う。内容が薄いものにならないような配慮が必要ではあるが、入り口となるような動画と、内容を深めるための動画の両方を作成することにより、対応する。

8. 当該学術団体が受け入れた研究資金等（令和7年3月末時点）

①科研費採択状況（特定奨励費以外）				
年度	研究種目	研究課題名 （研究代表者名）	金額 （単位：千円）	特定奨励費で行う事業との相違点
令和6年度	基盤C	失われた標本の価値を回復する研究－山階芳麿コレクション（小林さやか）	408 （直接経費のみ、以下同様）	山階芳麿が収集した標本を対象に、歴史的背景を調査し、関連する資料・文献を見出し、標本・資料双方の研究資源価値を向上させるための研究である。本事業で整備した標本・資料・文献を定められた利用手続きを経て活用するが、本事業とは目的が明確に異なる。 カリガネ個体群の個体数変動に係る要因を探るため、越冬生態と繁殖地を解明する研究である。本事業とは明らかに異なる。 コンピュータシミュレーションを駆使し、急激な適応放散を説明する新理論の確立を目指す研究である。本事業とは明らかに異なる。 隠蔽種を含むアホウドリの保全単位の再検討を目標として2タイプ間の生殖隔離を可能にする生態的要因を個体レベルで検証する研究である。本事業とは明らかに異なる。 鳥類における構造色の発色特性と生態の関連性を独自の視点から明らかにすることを目指す研究である。本事業とは明らかに異なる。
	基盤C	希少種カリガネの越冬生態が個体群動態に及ぼす影響に関する研究（澤祐介）	1,128	
	基盤B	適応放散のメカニズムを解明する一分散力の進化的変化に注目して（山崎剛史）	1,730	
	基盤C	隠蔽種を含む特別天然記念物アホウドリの生殖隔離に関連する行動学的研究（富田直樹）	2,280	
	基盤C	構造色特有の発色機構が進化させる信号進化：色素とは異なる発現性と機能の解明（森本元）	1,080	
	合計5件		6,626	
令和7年度		適応放散のメカニズムを解明する一分散力の進化的変化に注目して（山崎剛史）	130 （直接経費のみ、以下同様）	同上
		隠蔽種を含む特別天然記念物アホウドリの生殖隔離に関連する行動学的研究（富田直樹）	900	同上
		構造色特有の発色機構が進化させる信号進化：色素とは異なる発現性と機能の解明（森本元）	1,060	同上
	合計3件		2,090	

②他の研究資金の採択状況（府省、地方公共団体、研究助成法人、民間企業等からの研究費（国外のものを含む））

年度	配分機関等名	制度、助成金等名	研究課題等名（代表者等名）	金額（単位：千円）	特定奨励費で行う事業との相違点
令和6年度	サントリー世界愛鳥基金	鳥類保護団体への活動助成部門	絶滅危惧種アホウドリの保全に資する利用海域の特定（富田直樹）	2,000（間接費なし、以下同様）	尖閣諸島個体群のセンカクアホウドリの周年の利用海域を明らかにすることを目的とし、洋上捕獲した個体に衛星追跡型GPSを装着し、利用する海域が季節ごとに異なることを明らかにする。本事業とは明らかに異なる。
	米国魚類野生生物局 U. S. Fish and Wildlife Service	アホウドリ助成	State of the Birds Award（富田直樹）	9,449	伊豆諸島鳥島のアホウドリ繁殖地における抱卵期の卵数と育雛期の雛数をカウントし、アホウドリの保全状況を再検討する基礎データとする。本事業とは明らかに異なる。
	米国魚類野生生物局 U. S. Fish and Wildlife Service	アホウドリ助成	Alaska Ecological Services Conservation and Recovery Award（水田拓）	3,740	小笠原諸島聳島において、飛来数及び繁殖つがい数を増加させることを目的として、翌年度から実施予定の誘引調査のため、アホウドリデコイ修理と音声誘引装置作製を行う。本事業とは明らかに異なる。
	プロ・ナトゥーラ・ファンド	国内活動助成（一般枠）	日本の鳥類標識調査の100年 一次の100年間の発展に向けたシンポジウムとワークショップの実施（水田拓）	1,000	生物多様性国家戦略にも明記されている鳥類標識調査の知名度を今よりも上げ、次世代を担う調査員を育成するために調査開始100周年を契機としたシンポジウムとワークショップを開催。本事業とは明らかに異なる。
	公益財団法人JAC環境動物保護財団	動物福祉助成	ヤンバルクイナ保全のための生態研究と啓発（尾崎清明）	2,000	ヤンバルクイナの生態、特に繁殖生態を明らかにする目的で、電波発信機と自動撮影カメラによる調査を実施、知見を環境省の保護増殖検討会に提供、日本鳥学会大会等で発表。本事業とは明らかに異なる。
	キヤノン財団	キヤノン研究助成	鳥類学と航空工学の協同による飛翔の新たな理解と応用	1,900	鳥類学と航空工学の研究者が共同で未知なる鳥のしくみや生存戦略を探求し、耐故障性や低騒音といった課題を解決する新たな技術を創成、これまでにない新しいサービスの提供を目指す。本事業とは明らかに異なる。
	韓国環境生態研究所	共同研究	鳥インフルエンザ感染経路解明のための渡り性水鳥追跡	1,486	動態の解明と対策が喫緊の課題となっている高病原性鳥インフルエンザの感染が懸念されるガンカモ類、ツル類などの渡り性水鳥を対象に、発信器追跡を行う。本事業とは明らかに異なる。
	合計7件			21,575	

9. 次年度以降の事業計画

【令和7年度の事業計画】

(1) 収集管理班、(2) 公開班、(3) 人材育成班いずれも「4－2. 令和6年度の進展状況及び主な成果」の上段に記された令和6年度事業計画と同様の業務を行うが、下記の通りに一部変更する。

(2) 公開班では、収集された動画素材を編集して一般向け動画を作成し、インターネット上に公開する。

(3) 人材育成班では、収集された鳥類捕獲法の映像資料を教材用として編集し、実地に用いて効果を検証する。

III-5

研究所員の論文・講演等活動成果

1. 論文（査読あり）；原著論文・総説など

- Andreyenkova NG, Hong SY, Lin HS, Iwami Y, Kirillin RA, Literák I, Zhimulef IF, Karyakin IV (2024) Genetic relationships of populations of the Black Kite *Milvus migrans* (Accipitriformes: Accipitridae) in the east of its range in Asia and Australia. *Zootaxa* 5523(1): 83–99.
- Arima H, Sugawa H & Sawa Y (2025) Geographic variations in body size of the Black-headed Gull *Chroicocephalus ridibundus*. *Ornithological Science* 24(1): 27–37.
- Hsu C-H, Fukasawa K, Mizuta T, Kimoto Y, Mameno K, Ando H, Kang J & Kubo T (2025) “Wait” to promote high sighting rates of wildlife in tourism: evidence from a wildlife disturbance experiment. *Asia Pacific Journal of Tourism Research* 30(1): 27–37. doi: <https://doi.org/10.1080/10941665.2024.2413981>
- 今村知子, 齋藤武馬, 小田谷嘉弥, 齋藤安行 (2024) 千葉県柏市で死体修得された黒い下嘴を持つニシオジロビタキ *Ficedula parva* について. *山階鳥類学雑誌* 57(2): 222–229.
- Imada Y, Tanoue Y, Morimoto G. 2024. Nest predators and a possible distraction display of the Eurasian Wren (*Troglodytes troglodytes*). *The Wilson Journal of Ornithology* 136 (4) : 479–484. doi: <https://doi.org/10.1676/23-00096>
- Jiang Z, Zang W, Ericson PGP, Gang Song G, Wu S, Feng S, Drovetski SV, Liu G, Zhang D, Saitoh T, Alström P, Edwards SV, Lei F & Qu Y (2024) Gene flow and an anomaly zone complicate phylogenomic inference in a rapidly radiated avian family (Prunellidae) . *BMC Biology*: 22–49. doi: <https://doi.org/10.1186/s12915-024-01848-7>
- Kearns AM, Campana MG, Slikas B, Berry L, Saitoh T, Graves GR, Cibois A & Fleischer RC (2024) Untangling the colonization history of the Australo-Pacific reed warblers, one of the world’s great island radiations. *Evolution* 78(12): 1900–1915.
- Kishimoto N, Wada D, Tamayama M, Iwami Y, Tomita N, Ikeda T, Tanahashi Y, Katagiri K (2024) Evaluation of wind tunnel test results of taxidermy Black-tailed Gull (*Larus crassirostris*) . *Proceedings of 34rd Congress of the International Council of the Aeronautical Sciences*.
- Kobayashi S (2024) Bird specimens transferred from overseas museums to National Museums of Japan in the 1800s: The Tokyo Imperial Household Museum Collection. *Biodiversity Information Science and Standards* 8: e134958. doi: <https://doi.org/10.3897/biss.8.134958>
- 黒田清子, 小林さやか, 齋藤武馬, 浅井芝樹 (2024) 2017年6月から2023年3月までの皇居の鳥類相. *山階鳥類学雑誌* 56(1): 60–77. doi: <https://doi.org/10.3312/jyio.56.60>
- Lv X, Zhao Q, Fei M, Sawa Y, Ikeuchi T, Yu G, Zhang J, Meng F, Zhang J, Zhang Y, Xie Y, Cao L & Fox AD (2024) First observations in 20 years of Brent Geese *Branta bernicla* wintering on the Shandong coast, China. *Wildfowl* 74: 84–98.
- 仲村昇, 油田照秋, 千田万里子, 水田拓 (2024) 2021～2023年に福島県で行われた繁殖鳥モニタリング (MAPS) 調査. *山階鳥類学雑誌* 56(1): 83–95.
- Natori Y, Nakagawa T, Saito T, Kato T, Seo T, Yata M, Sawa Y, Yasuda M, Enomoto A & Isobe A (2025) Conservation education for sustainable development through field internship at NGOs. *Current Research in Environmental Sustainability* 9: 100278.
- 西田澄子, 鶴見みや古, 北村亘 (2025) 大正・昭和初期の外国原産鳥類の飼養状況と野外逸出状況からみた外来種定着リスク. *日本鳥学会誌* 74: 45–54.
- Nishino A, Tatemoto A, Ishijima K, Inoue Y, Park E, Yamamoto T, Taira M, Kuroda Y, Virhuez-Mendoza M, Harada M, Nakamura N, Morimoto G, Yamaguchi H, Ariizumi T, Takano A, Shimoda H, Matsuno K, and Maeda K (2024) Transboundary movement of Yezo virus via ticks on migratory birds, Japan, 2020–2021. *Emerging Infectious Diseases* 30(12): 2674–2678. doi: <https://doi.org/10.3201/eid3012.240539>
- Sabano Y, Sawa Y, Uemura S & Kurechi M (2024) Population trends and distribution of the Lesser Snow Goose *Anser*

caerulescens caerulescens in Japan, based on 50 years of monitoring. *Wildfowl* 74: 69–83.

齋藤武馬 (2024) 北海道におけるオオムシクイ *Phylloscopus examinandus* の繁殖分布調査. *山階鳥類学雑誌* 56 (2): 194–208.

Sawa Y, Sugawa H, Wada T, Sato T, Arima H, Yomoda N & Nishiumi I (2025) Variation of seasonal movement and body size for wintering populations of Black-headed Gulls in Japan. *Ornithological Science* 24 (1) : 55–68.

Terada T, Shimoda M, Waku D & Ogawa H (2024) Formation of the pecking order during small-scale floor feeding in Helmeted Guinea Fowl (*Numida meleagris*). *The Journal of Poultry Science* 61: 2024020. doi: <https://doi.org/10.2141/jpsa.2024020>

Torikai H, Kawaguchi H & Mizuta T (2025) Survival and movement of the endangered Amami Woodcock *Scolopax mira* revealed through banding on Amami-Oshima Island. *Ornithological Science* 24 (1) : 47–53. doi: <https://doi.org/10.2326/osj.24.47>

Yamasaki T & Kobayashi Y (2024) Evolving dispersal ability causes rapid adaptive radiation. *Scientific Reports* 14: 15734. doi: <https://doi.org/10.1038/s41598-024-66435-w>

2. 論文 (査読なし) ; 報告など

富田直樹, 成田章 (2024) ウミネコ繁殖地蕪島における 2012 年から 2023 年の繁殖モニタリング. *山階鳥類学雑誌* 56(1): 78–82.

山崎剛史, 亀谷辰朗, 今村知子 (2024). ヨタカ類に近縁な鳥類の新しい属と種の和名. *山階鳥類学雑誌* 56 (2): 236–243.

3. 著書 (論文集・分担執筆・翻訳・監修含む、分担執筆に参加した所員の順番は姓のアルファベット順)

小林さやか, 鶴見みや古 (分担執筆) (2025) In: 我孫子市鳥の博物館第 93 回企画展図録「山階芳麿博士が作った図鑑—『日本の鳥類と其の生態』ができるまで」. 我孫子市鳥の博物館, 山階鳥類研究所 (編), 我孫子市鳥の博物館, 我孫子市.

平岡考 (2024) (監修) 第二章「本堂内陣の天井画」, (執筆) 第五章「天井画の研究—林泉寺天井画の鳥類の図像の同定」. In: 木村恵隆, 木村立枝 (纂修), 高橋優, 奈緒子 (編) 増林 林泉寺 本堂内陣天井画. 林泉寺, 越谷.

平岡考, 齋藤武馬, 山崎剛史 (2024) In: 日本鳥類目録改訂第 8 版. 日本鳥学会鳥類目録編集委員会 (編). 日本鳥学会, 東京.

富田直樹 (2024) 第 2 章 繁殖生態調査法 (分担執筆). In: 野外鳥類調査ガイド. 綿貫豊, 高木昌興 (編). 朝倉書店, 東京.

森本元 (2024) 第 1 章 個体群調査法 (分担執筆), 第 4 章 形態調査法 (分担執筆). In: 野外鳥類調査ガイド. 綿貫豊, 高木昌興 (編). 朝倉書店, 東京.

浅井芝樹, 平岡考, 岩見恭子, 小林さやか, 水田拓, 森本元, 仲村昇, 小川博, 尾崎清明, 齋藤武馬, 澤祐介, 千田万里子, 富田直樹, 油田照秋 (分担執筆) (2024) 足環をつけた鳥が教えてくれること. 山階鳥類研究所 (著). 山と溪谷社, 東京.

平岡考 (2025) 毎日運行する漁船に営巣したツバメ. In: とことんツバメ, アマツバメ. BIRDER 編集部 (編) 佐藤信敏 (写真). 文一総合出版, 東京.

4. 学会発表等

浅井美紅, 森本元 (2024) ヒドリガモの雌雄比とペア形成率の季節変化. 日本鳥学会 2024 年度大会, ポスター発表 (9 月 14 日, 東京大学, 東京)

林はるか, 西沢文吾, 富田直樹, 越智大介 (2024) クロアシアホウドリにおける繁殖個体と繁殖スキップ個体の利用海域の違い. 日本鳥学会 2024 年度大会, 口頭発表 (9 月 14 日, 東京大学)

林はるか, 西沢文吾, 富田直樹, 塩出大輔, 越智大介 (2024) クロアシアホウドリにおける繁殖個体と繁殖スキップ個体の利用海域の違い. 令和 6 年度日本水産学会秋季大会 (9 月 25 日, 京都大学)

Hayashi H, Nishizawa B, Tomita N, Shiode D & Ochi D. (2025) Spatial segregation and bycatch risk: a case study of Black-footed Albatrosses in the Northwestern Pacific. 2025 Waterbird Society and Pacific Seabird Group Joint Meeting (January 7, 2025, Costa Rica)

平岡考 (2024) 「ダチョウの平和」に適応的意義がないなんて簡単に決めていいのか?. 日本鳥学会 2024

- 年度大会, 口頭発表(9月14日, 東京大学農学部キャンパス, 東京)
- 石川弘樹, 對比地孝亘, 岩見恭子(2024) 現生鳥類の未成熟個体の骨形態と孵化後の成長に伴う骨化・癒合状態の変化. 日本鳥学会2024年度大会, 口頭発表(9月14日, 東京大学, 東京)
- 岩見恭子(2024) 大型海鳥の剥製を使った風洞実験. キヤノン財団リユニオン2024(12月6日, AP東京丸の内, 東京)
- 岩見恭子, 富田直樹, 兵藤不二夫(2024) 鳥類標本に付随する種横断的な安定同位体比のデータベース. 日本鳥学会2024年度大会, ポスター発表(9月15日, 東京大学, 東京)
- 加藤ゆき, 小林さやか, 岩見恭子(2024) 第6回標本集会「博物館施設の標本作製の現状と課題」. 日本鳥学会2024年度大会, 自由集会(9月14日, 東京大学, 東京)
- 岸本直子, 玉山雅人, 和田大地, 岩見恭子, 富田直樹, 池田忠繁, 棚橋美治, 片桐一彰, 出口智広(2024) ウミネコ剥製の風洞実験における横風の影響評価. 日本航空宇宙学会 特殊航空機部門 第62回飛行機シンポジウム, 口頭発表(10月17日, AOSSA福井市地域交流プラザ・福井市賑わい交流施設バビリオンホール)
- Kobayashi S (2024) Bird specimens transferred from overseas museums to national museums of Japan in the 1800s: the Tokyo Imperial Household Museum collection. SPNHC & TDWG Joint Conference, Poster session (3 September 2024, Okinawa Convention Center)
- 小林さやか(2024) 1800年代に日本の国立博物館が海外から入手した鳥類標本群. 日本鳥学会2024年度大会, ポスター発表(9月15日, 東京大学, 東京)
- 小林航己, 山崎剛史, 中田敏是, 田中博人(2025) 柔軟な風切羽を持つクイナ模倣翼の空力特性計測. エアロ・アクアバイオメカニズム学会 第49回定例講演会, 口頭発表(3月21日, 工学院大学, 東京)
- 松丸一郎, 澤祐介, 富田直樹, 佐藤達夫, 奴賀俊光, 平田和彦(2024) 東京都心ビル街で繁殖するウミネコ: GPS およびカラーリング標識を用いた移動範囲. 日本鳥学会2024年度大会, 口頭発表(9月14日, 東京大学)
- 水田拓(2024) マングースは奄美の鳥類に影響を与えてきたか. 日本鳥学会2024年度大会, 自由集会「奄美大島における侵略的外来種マングース防除事業の成果と島の生態系保全の未来」(9月14日, 東京大学, 東京)
- 水田拓(2024) マングースは奄美大島の固有鳥類に影響を与えてきたか. 第30回日本野生動物医学会大会, 自由集会「マングース対策の奄美での成果と沖縄のこれからを考える」(12月14日, 沖縄科学技術大学院大学, 恩納村)
- 水谷友一, 杉山響己, 屋敷智咲, 新宮仁大, 鈴木世莉奈, 富田直樹, 成田章, 後藤佑介, 依田憲(2024) 海鳥の営巣位置に関わる生物学的要因と繁殖成績. 日本鳥学会2024年度大会, 口頭発表(9月14日, 東京大学)
- 尾崎清明, 渡久地豊, 中谷裕美子, 長嶺隆, 椎野風香, 大沼学(2024) ヤンバルクイナのノネコによる捕食. 日本鳥学会2024年度大会, 口頭発表(9月14日, 東京大学, 東京)
- 齋藤武馬(2024) オオムシクイは北海道のどこで繁殖するのか?. 日本鳥学会2024年度大会, 口頭発表(9月14日, 東京大学, 東京)
- Sawa Y, Ikeuchi T, Tamura C & Nakamura N (2025) Population status and tracking result of Lesser White-fronted Goose *Anser erythropus* wintering in Japan. 21st International Goose Specialist Group Meeting (28 January, South Moravia, Czechia)
- 澤祐介, 藤井薫, 石下亜衣紗, 池内俊雄, 田村智恵子, 嶋田哲郎, Lei Cao, David Ward (2024) 北海道東部におけるコクガンの環境利用と保護区域設定への活用. 日本鳥学会2024年度大会, 口頭発表(9月14日, 東京大学弥生キャンパス, 東京)
- 柴田紗帆, 澤祐介, 館坂珠季, 新井優梨花, 村上正志, 伴さやか, 高橋弘喜(2024) 渡り鳥より分離された新産種および未記載種. 日本微生物資源学会 第30回大会, ポスター発表(7月4日, 木更津市金田地域交流センター, 木更津市)
- 柴田紗帆, 澤祐介, 館坂珠季, 新井優梨花, 村上正志, 伴さやか, 高橋弘喜(2024) 鳥類試料から分離された菌類の多様性. 日本菌学会第68回大会(5月19日, 八戸ポータルミュージアム, 八戸市)
- 棚橋美治, 奥村空充, 岸本直子, 岩見恭子, 富田直樹, 玉山雅人, 池田忠繁(2024) ハリオアマツバメの剥製を用いた飛行特性に関する考察. 日本航空宇宙学会 特殊航空機部門第62回飛行機シンポジウム, 口頭発表(10月16日, AOSSA福井市地域交流プラザ・福井市賑わい交流施設バビリオンホール)

富田直樹, 細谷淳, 江田真毅, 泉洋江, 佐藤文男 (2024) 洋上捕獲したセンカクアホウドリの周年の利用海域. 日本鳥学会2024年度大会, 口頭発表(9月14日, 東京大学)

浦達也, 澤祐介, 風間健太郎, 中原亨, 葉山政治 (2024) 風力発電施設が渡り鳥に与える影響と累積的影響について考える. 日本鳥学会2024年度大会, 自由集会(9月14日, 東京大学弥生キャンパス, 東京)

油田照秋 (2024) アルバトロス類保全の最前線 移住事業の進捗とモニタリングの必要性, 日本鳥学会2024年度大会, 自由集会「アルバトロス類の将来にわたる保全に向けてー現状と課題ー」(9月14日, 東京大学, 東京)

5. シンポジウム・研究会等講演

水田拓 (2024) 趣旨説明. 鳥類標識調査100周年記念公開シンポジウム「足環をつけた鳥が教えてくれることー鳥類標識調査のこれまでとこれからー」(11月23日, 東京農業大学, 東京)

水田拓 (2024) なぜ守るのか: 奄美大島における希少種保全の取り組み. 江戸川大学国立公園研究所主催フォーラム2024「生物多様性保全と保護地域ーネイチャーポジティブに向けた連携を考えるー」(11月23日, 江戸川大学, 流山市)

尾崎清明 (2024) 「ヤンバルクイナってどんな鳥?ー発見から最新の調査で分かってきたことー」, 公開シンポジウム「ヤンバルクイナおかえり名護市へ!」(10月5日, 名護博物館, 名護市)

澤祐介 (2025) GPS技術によるヒシクイ両亜種の渡り解明. 日本鳥学会員近畿地区懇談会第118回例会(2月2日, 琵琶湖水鳥湿地センター, 長浜市)

澤祐介 (2024) 日本で越冬するユリカモメの渡りを読み解くー標識調査とその応用研究からー. 鳥類標識調査100周年記念公開シンポジウム 足環をつけた鳥が教えてくれることー鳥類標識調査のこれまでとこれからー(11月23日, 東京)

山崎剛史 (2024) 生物多様性とソフトロボティクス. 第2回ソフトロボットシンポジウム(6月21日, 大濱信泉記念館, 石垣市)

6. 一般講演・研修会等

浅井芝樹 (2024) 絶滅した飛べないクイナ復活の謎. 我孫子市鳥の博物館, 山階鳥類研究所による鳥のサイエンストーク(7月20日, オンライン)

浅井芝樹 (2024) 皇居の鳥. ジャパン・バード・フェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー(11月2日, 山階鳥類研究所, 我孫子市)

平岡考 (2024) 正倉院宝物バードウォッチング. 奈良シニア大学in東京.(10月7日, 奈良シニア大学東京校, 東京(ハイブリッド))

平岡考 (2024) 万国共通な学名が図鑑によって違うわけ, Young探鳥会交流会(10月16日, 日本野鳥の会東京(オンライン))

平岡考 (2024) アホウドリー江戸から令和そして未来へ. ジャパン・バード・フェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー(11月2日, 我孫子市)

平岡考 (2024) 野鳥観察の基礎知識. 松戸市地域環境調査員研修会(11月18日, 松戸市勤労会館, 松戸市)

平岡考 (2025) 皇居に飛来したヤツガシラの話. 我孫子市鳥の博物館, 山階鳥類研究所による鳥のサイエンストーク(1月18日, オンライン)

岩見恭子 (2024) 標本製作技術講習会(キュウシュウフクロウ). 博物館学芸員, 大学院生, ボランティア職員34名. 4日間.(6月9ー12日, 森林総合研究所九州支所)

岩見恭子 (2024) 標本製作技術講習会(海鳥の解剖と標本製作). 日本鳥学会大会・鳥の学校10名. 1日間.(9月17日, 山階鳥類研究所)

岩見恭子 (2024) 鳥類の標本学ー標本収集とその意義ー. 朝日カルチャー(2024年12月20日, 朝日カルチャーセンター新宿)

岩見恭子 (2024) 標本製作技術講習会. 相模原市博物館学芸員ほか11名. 1日間.(12月22日, 相模原市博物館, 相模原市)

小林さやか (2024) 国立科学博物館が所蔵するヤマイヌ剥製標本はニホンオオカミか?. 我孫子市鳥の博物館, 山階鳥類研究所による鳥のサイエンストーク(6月15日, オンライン)

小林さやか (2024) 背景を知れば面白い標本の話. ジャパン・バード・フェスティバル. 山階鳥研見にレクチャー(11月3日, 山階鳥類研究所, 我孫子市)

小林さやか(2024)背景を知るとおもしろい標本の話. 毎日新聞企業人大学(11月21日, ホテルグリーンタワー幕張)

水田拓(2024)絶滅の危機から復活へ! マングース根絶の成果. ジャパン・バード・フェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー(11月2日, 我孫子市)

森本元(2024)鳥類標識調査講習会・実技講習(10月, 福島潟ステーション, 新潟市)

森本元(2024)鳥類標識調査講習会・講義講習(12月, 山階鳥類研究所, 我孫子市)

森本元(2024)鳥類標識調査講習会・実技講習研修会(11月, 福島潟ステーション, 新潟市)

尾崎清明(2024)ヤンバルクイナの野生復帰作戦, 京都市動物園・山階鳥類研究所連携記念講演会(8月4日, 京都市動物園, 京都市)

尾崎清明(2024)ヤンバルクイナ発見前後のエピソード, ジャパン・バード・フェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー(11月2日, 我孫子市)

尾崎清明(2024)絶滅危惧種ヤンバルクイナの未来, 山階鳥類研究所連携講座(11月30日, 足立区生涯学習センター, 東京)

澤祐介, 千田万里子(2024)京都市動物園・山階鳥類研究所連携協定セミナー「山階鳥学セミナー(捕獲技術入門編)」(11月30日-12月1日, 京都市動物園, 京都市)

澤祐介(2024)山階鳥学セミナー: 発信器装着実習(11月25日, 山階鳥類研究所, 我孫子市)

澤祐介(2024)鳥類標識調査講習会・実技講習(11月1-3日, 織田ステーション, 越前町)

澤祐介(2024)DAMBO キッズ鳥学会〜渡り鳥を通して環境問題とアートを学ぶ〜. ARTBAY TOKYO アートフェスティバル2024〜Port of Dialogue〜(9月28-29日, 10月5-6日, 東京)

澤祐介(2024)野外観察法(龍谷大学夏季集中講義)(8月26-29日, 京都市)

澤祐介(2024)渡り鳥の不思議(龍谷大学講義: 日本の自然)(5月28日, オンライン)

千田万里子(2024)標識センター 2022年標識調査 おいしいとこだけつまみぐい. ジャパン・バード・フェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー(11月3日, 山階鳥類研究所, 我孫子市).

千田万里子(2024)野生動物保全技術実習・学外選択実習・鳥類捕獲実習(酪農学園大学環境共生学類野生動物学コースとの実習)(8月22日, オンライン)

千田万里子(2024)鳥類標識調査講習会・講義講習(12月8-10日, 山階鳥類研究所, 我孫子市)

鶴見みや古(2024)3種のカワセミの謎〜山階鳥研のステンドグラス〜. ジャパン・バード・フェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー(11月2日, 我孫子市)

鶴見みや古(2024)企画展「山階芳麿博士の作った図鑑」. 我孫子市鳥の博物館ギャラリートーク(8月31日, 我孫子市)

油田照秋(2024)蘇れ!! アホウドリ繁殖地〜小笠原諸島智島での挑戦【山階鳥類研究所講演会】絶滅危惧種アホウドリの未来を守る! 生物多様性保全の現場から緊急レポート! (4月23日, Ecozeria, 3×3 Lab Future, 東京)

油田照秋(2024)アホウドリ保全の最前線 現在の状況と課題. 世界アルバトロスデー&シーバードウィーク. イベント2024(6月16日, 東京港野鳥公園, 東京+オンライン)

7. 一般雑誌・新聞等への執筆

平岡考(2024)鳥ってどんな生きもの? 初級入門編. “鳥沼にはまる”テーマ別の良書選. BIRDER 38(7): 26.

平岡考(2024)ヒタキとツグミ, ちょっと複雑な事情〜「ツグミ科」消失と復活の謎. BIRDER 38(11): 31.

平岡考(2025)君はハリオアマツバメの針を見たか? まだの人は上野に急げ! 〜「特別展 鳥」のご紹介. 日本鳥学会 鳥学通信 2025-01-30. <https://ornithology.jp/newsletter/articles/1817/>

岩見恭子(2024)解剖学者の巻 舞台裏座談会. 通販生活 2024年初冬11・12月号: 171-177.

小林さやか(2024)企画展「山階芳麿博士の作った図鑑」の紹介. 日本鳥学会鳥学通信 2024-08-14. <https://ornithology.jp/newsletter/articles/1451/>

水田拓(2024)鳥を渡る鳥, 島に留まる鳥-南西諸島の鳥類の多様性とその保全. 特集 南西諸島 島々の成り立ちが育んだ生物の宝庫. Civil Engineering Consultant 305: 20-23.

水田拓(2025)わからないからおもしろい, アマミヤマシギのディスプレイ. 特集 野鳥を知る・楽しむ(南西諸島編). 私たちの自然 66(657): 8-9.

水田拓(2025)書籍『足環をつけた鳥が教えてくれること』の紹介. あまみやましぎ No. 141: 36.

森本元(2024)標す・識る・調べる・查べる〜足環とともに100年: モニタリングとしての標識調査.

BIRDER 2024年5月号.

森本元(2024)派手な鳥も地味な鳥も「羽の中身」は同じだった!? 羽毛のメカニズムを探る. BIRDER 2024年10月号.

森本元(2024)バンディングかわら版(第9号)

森本元(2024)バンディングかわら版(第10号)

尾崎清明(2025)豊富なデータと最新機器でスピードアップする生態解明. ヘルシスト 49: 2(290号), (株)ヤクルト本社広報室.

齋藤武馬(2024)標す・識る・調べる・查べる～足環とともに100年: 新分類や初記録につながる標識調査. BIRDER 2024年6月号: 44-45.

齋藤武馬(2024)所員エッセー 高山での鳥類調査の苦勞と楽しみ. 山階鳥研NEWS 36(4): 5.

富田直樹(2024)山形県飛島ウミネコ繁殖地の再生に向けて. モニタリングサイト1000ニュースレター 18: 4

富田直樹(2025)アホウドリとセンカクアホウドリ, 鳥島を離れてどこへ行く? 山階鳥研ニュース 318: 4

鶴見みや古(2024)企画展「山階芳麿博士の作った図鑑」山階鳥研NEWS 36(5): 4-5.

油田照秋(2024)標す・識る・調べる・查べる～足環とともに100年: 標識で探る, 鳥の寿命. BIRDER 2024年3月号.

油田照秋(2024)鴛島のアホウドリ 近況報告. Megaptera 96: 2.

8. 特許・知的所有権

なし

9. 査読

浅井芝樹

日本鳥学会『Ornithological Science』(1回)

小林さやか

日本鳥学会『日本鳥学会誌』(1回)

水田拓

日本鳥学会『Ornithological Science』(1回), 日本生態学会『Ecological Research』(1回), 日本鳥学会『日本鳥学会誌』(1回), 日本動物学会『Zoological Science』(1回), 琉球大学資料館(風樹館)『Fauna Ryukyuna』(1回), 『Avian Conservation and Ecology』(1回), 『Taprobanica』(1回)

森本元

Strix(1回), バードリサーチ『Bird Research』(1回), 沖縄生物学会誌(1回), 日本鳥学会『Ornithological Science』(1回), 日本鳥類標識協会誌(2回)

尾崎清明

日本動物学会『Zoological Science』(1回), 日本鳥学会『Ornithological Science』(1回)

齋藤武馬

バードリサーチ『Bird Research』(1回), 山階鳥類研究所『山階鳥類学雑誌』(1回)

澤祐介

Wildfowl & Wetlands Trust『Wildfowl』(1回), 日本鳥学会『日本鳥学会誌』(1回)

富田直樹

日本鳥学会『日本鳥学会誌』(1回), 日本鳥学会『Ornithological Science』(1回)

山崎剛史

Integrative Organismal Biology(1回), 日本鳥学会『Ornithological Science』(1回)

油田照秋

山階鳥類研究所『山階鳥類学雑誌』(1回), 日本鳥学会『Ornithological Science』(1回)

III－6

所蔵資料の利用実績

1. 標本

標本閲覧者数 21件（のべ29人）

標本貸出3件（のべ10点）

2. 図書資料

図書資料閲覧者数 14件

文献複写 4件15文献

3. 所蔵資料等の貸出・提供

- ・霞会館150周年史映像編DVD「映像でつづる百五十年」に山階芳麿博士の写真1点を貸出。
- ・「わけあって絶滅しました。展」富山会場（氷見市芸術文化館、2024年7月13日～8月21日）にアホウドリのデコイ1点を貸出。
- ・ウェブメディアいきもののわ2024年9月21日掲載の「大江戸八百野鳥 ～変化した？していない？江戸・東京の鳥たち～【第2回】オキノタユウや信天翁と呼ばれたアホウドリ」（細川博昭 著）(<https://midori-ikimono.com/2024/09/20/ooedo2/>) にアホウドリの飛翔の写真1点を貸出。
- ・谷津干潟自然観察センターで行われた中村恵美 写真展「eternally～消えかけていた翼が再び空へ蘇った～」(2024年10月1日～11月1日) にアホウドリのデコイ1点を貸出。
- ・我孫子市鳥の博物館第93回企画展（山階鳥類研究所共催）「山階芳麿博士の作った図鑑－『日本の鳥類と其の生態』ができるまで」(2024年7月13日～11月4日) に標本、書籍ほか123点を提供。
- ・国立映画アーカイブ「フィルムは記録する－国立映画アーカイブ歴史映像ポータルサイト－」にて山階家旧蔵フィルム「小鷺の蕃殖 千葉縣新浜御獵場に於て、昭和六年五月撮影」(9分、サイレント、白黒) (作品番号ST000232) (2024年12月19日から) が無料公開。
- ・杉並区立郷土博物館 国指定史跡復原整備完成記念企画展「近衛家と細川家 着物が紡ぐ家族の記憶」(2025年1月11日～3月9日) に山階家旧蔵のボンボニエール1点を貸出。
- ・富士見町高原のミュージアム企画展「こんなふうに鳥と人は暮らしてきた～鳥獣の歴史と現在につながる鳥類調査の役割～」(2025年2月8日～3月23日) に堀内讃位狩猟写真12点を提供。
- ・株式会社PHP研究所1998年12月発行の『「アホウドリ」と生きた12年』(岡本文良 作・高田勲 絵) の電子書籍化(2025年3月配信開始) にあたり、当時掲載のアホウドリ写真1点の使用を再許諾。
- ・「わけあって絶滅しました。展」愛媛会場（佐川美術館、2025年3月8日～5月6日）にアホウドリのデコイ1点を貸出。
- ・霞会館記念学習院ミュージアムリニューアルオープン記念展「学習院コレクション 華族文化 美の玉手箱－芸術と伝統文化のパトロネージュ」(2025年3月14日～5月17日) に山階家旧蔵資料15点を提供。
- ・長佐古美奈子（著）「＜改訂新版＞ボンボニエールと近代皇室文化」(2025年4月11日発行) に山階家旧蔵のボンボニエール14点の画像を提供。

4. データアクセス数

本年度のアクセス数は「標本データベース」の閲覧者数がのべ3,119,523人、「図書・文化資料データベース」の閲覧者数はのべ397人であった。

5. 鳥類標識調査データ利用状況

鳥類標識調査データ利用申請書の提出を求め、審査し必要なデータの提供を行っている。

今年度は61件の申請があり、目的別にみると研究目的が40件、行政資料が4件、教育・啓発目的が12件、保全保護関係が1件、アセスメント関係が4件であった。

III-7

新聞・雑誌・メディア記事掲載記録

●新聞・テレビニュース・ネットニュース等での報道や協力

山階鳥研または所員個人が記事にコメントをした場合はそのことを記した。山階鳥研の関係者名について特に記述がない場合は、山階鳥研またはその所員の活動についての報道であるか、山階鳥研が何らかの形で記事や催しに協力した記事であることを示す。一つの記事が複数のメディアに掲載された場合は、オリジナルの配信元または主要なメディアのみ掲載した。掲載は日付順とし、日付は発行日や配信日、放送日のほか対応した日の場合がある。

- ・ <「麗人科学者」八重子の日記> (番外編) 皇室献上の鳥 世紀隔て脚光 大正末期に3羽 山階研など保管 (東京新聞, 2024/4/1)
- ・ コクガン見守り半世紀 (北海道新聞, 2024/4/2)
- ・ テレビ朝日「スーパーJチャンネル」(2024/4/17, ジュズカケバトの単為発生について, 小川 取材受)
- ・ ペットの鳩が交尾せずに産卵→ヒナがかえった…! 飼い主も驚愕「単体で生殖できるの?」【鳥類研究者が解説】(まいどなニュース, 2024/4/18, 小川 取材受)
- ・ 「あ、これってニホンオオカミ?」小学生が見つけた絶滅動物の剥製 (朝日新聞デジタル, 2024/4/20)
- ・ 科博に眠る剥製 小学生のレーダーがピピッと鳴った (朝日新聞夕刊, 2024/4/23)
- ・ 1匹飼いの鳩から産まれた「奇跡のヒナ」, 生後2週間で急死 飼い主も無念「短命だけど世界一愛された」(まいどなニュース, 2024/4/24, 小川 取材受)
- ・ NHK「ウチの動物園」ヤンバルクイナ発見時の動画提供(NHK総合テレビ, 2024/4/26, 尾崎 動画提供)
- ・ 化学かわらばん: 剥製はヤマイヌかオオカミか (現代化学2024年5月号, No.638)
- ・ ナゾの剥製は ニホンオオカミ (読売KODOMO新聞, 2024/5/2)
- ・ 渡り鳥の生態解き明かせ (福井新聞, 2024/5/8)
- ・ やっぱニホンオオカミだった! (朝日小学生新聞, 2024/5/11)
- ・ 絶滅危惧種アホウドリ 小笠原諸島・聳島でヒナ3羽が誕生 (ウェブメディア『いきもののわ』, 2024/6/13)
- ・ 100年続く「職人技」の調査 小さな印で分かる鳥の驚きの生態 (毎日新聞, 2024/6/15, 水田・平岡 取材受)
- ・ 足環で見える鳥の生態 (くらしナビ・環境, 毎日新聞, 2024/6/18, 水田・平岡 取材受)
- ・ 今季3羽誕生 過去最多です (ニュースあなた発, 東京新聞, 2024/6/21)
- ・ 熱海市立図書館「X」で紹介 (2024/6/28)
- ・ 「モーリシャスインコ」原画「鳥の博物館」の7月展示に貸出し (伊豆毎日新聞, 2024/6/29)
- ・ 熱海市所蔵絵画貸し出し 小林重三「絶滅インコ」千葉の鳥企画展へ (熱海新聞, 2024/6/29)
- ・ 山階芳麿博士の作った図鑑ー『日本の鳥類と其の生態』ができるまでー (gooニュース, 2024/7/3)
- ・ 東京都総務局沖ノ鳥島・南鳥島ウェブサイト: スペシャルインタビュー英語版 (東京都総務局, 2024/7/12)
- ・ 企画展「山階芳麿博士の作った図鑑」ー『日本の鳥類と其の生態』ができるまでー (osotoiko, 2024/7/17)
- ・ ペンギンが教えてくれた深世界「バイオロギング」の内藤氏に山階賞 (朝日新聞デジタル, 2024/7/29, 取材協力)
- ・ 夏休みの自由研究が, 世界的発見へーニホンオオカミの論文を書いた小学生の探究心 (YAHOO! ニュース, 2024/8/11)
- ・ NHK「首都圏NEWS」"山階芳麿の鳥類図鑑の制作過程などを紹介する企画展"2024/8/20)
- ・ 巨大ハブとヤンバルクイナの動画が反響 実は親子クイナだった! なぜ? いったい何があったのか 専門家に聞いた【どローカルリポート】沖縄 (琉球新報, 2024/8/25, 尾崎 取材受)
- ・ NHK「あさイチ」ヤンバルクイナが交通事故に遭いそうな動画提供 (NHK総合テレビ, 2024/8/26, 尾崎 動画提供)

- ・ 90年愛される鳥図鑑（とりずかん）（読売KODOMO新聞, 2024/8/29）
- ・ ニホンオオカミの謎に迫る中学生研究者・小森日菜子さん（ニッポンドットコム, 日本語版 2024/8/30, 中国語版 2024/9/20, ロシア語版 2024/10/29, 英語版 2024/11/13, フランス語版 2024/12/27, アラビア語版 2025/1/23）
- ・ ハジロビタキやツクシガモ, 貴重な鳥類標本800点超寄贈☆ 新潟市の風間辰夫さんに山階鳥類研究所が感謝状（新潟日報デジタルプラス, 2024/9/3）
- ・ 鳥の標識調査（はじまりを歩く, 朝日新聞, 2024年9月28日, 水田 取材受）
- ・ 「クイナ」シンポ あす名護博物館 山階鳥類研究所（沖縄タイムスプラス, 2024/10/4, 山階鳥研主催・尾崎 講演の紹介）
- ・ 名護でヤンバルクイナの生態考えるシンポジウム マングース対策も（みんなの経済新聞LOCAL NEWS NETWORK, 2024/10/7, 山階鳥研主催・尾崎 講演の紹介）
- ・ 我孫子市鳥の博物館「山階芳麿博士の作った図鑑－『日本の鳥類と其の生態』ができるまで－」（YouTube「我孫子インフォメーションセンター アビシルベ」公式チャンネル, 2024/10/19）
- ・ 山階博士の鳥類図鑑紹介 世界的評価の経緯, 精巧木口木版も（毎日新聞千葉版, 2024/10/29）
- ・ 人工繁殖や天敵覚えさせる訓練も ヤンバルクイナ守る施策, 研究者が紹介 名護市の定着目指しシンポジウム（沖縄タイムス, 2024/10/29, 尾崎 取材受）
- ・ 日本テレビ「シャカレキ」ヤンバルクイナ発見時の動画提供（日本テレビ, 2024/11/9, 尾崎 動画提供）
- ・ NHK北海道 天然記念物コクガンの捕獲調査 道東の野付湾で（2024/11/19, 澤 取材受）
- ・ コクガンの調査 発信器付け放鳥（読売新聞, 2024/11/19, 澤 取材受）
- ・ 「鳥の生態, 足環で解明」科学スコープ（京都新聞夕刊, 2024/12/4, 尾崎 取材受）
- ・ 「鳥類標識調査について」笑福亭晃瓶のほっかほかラジオ（KBS京都ラジオ, 2024/12/16, 尾崎 出演）
- ・ アホウドリの長寿新記録, 5年近く伸ばす 卵抱く姿「保全の成果」（朝日新聞デジタル, 2025/1/24, 富田 取材受）
- ・ 鳥島のアホウドリ 長寿記録42年7カ月 大幅に更新, 国内の野鳥「最高齢」山階鳥類研（朝日新聞夕刊, 2025/2/3, 富田 取材受）
- ・ 能登半島にトキ放鳥へ, 本州で初 26年度上半期, 復興シンボルに（共同通信, 2025/2/14, 尾崎 取材受）
- ・ NHK「ニュースウオッチ9」トキ来年6月ごろに能登地域で放鳥へ 本州では初めて（NHK総合テレビ, 2025/2/14, 尾崎取材受）
- ・ 能登半島にトキ放鳥へ, 本州で初 26年度上半期, 復興シンボルに（共同通信社, 2025/2/14, 尾崎取材受）
- ・ 能登にトキ放鳥決定 26年6月, 復興の象徴（北國新聞, 2025/2/15, 尾崎 取材受）
- ・ NHK「サタデーウオッチ9」トキが再び能登の空に 本州初の放鳥に地元も期待（NHK総合テレビ, 2025/2/19, 尾崎 出演）
- ・ トキの放鳥 なぜ本州でも？（読売新聞夕刊, 2025/ 2/27）
- ・ 鳥たちはどこへ飛ぶのだろう 生物多様性の保全に役立つアルミ製足環（日本アルミニウム協会「アルミエージ」201号, 取材協力）

IV

令和6年度決算資料

IV-1

貸借対照表

令和7年3月31日現在

(単位：円)

科目	当年度	前年度	増減
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	212,594,734	214,944,863	△2,350,129
有価証券	1,000,000	1,000,000	0
未収金	49,769,550	31,312,083	18,457,467
前払金	1,635,139	1,527,218	107,921
前払費用	337,480	330,880	6,600
流動資産合計	265,336,903	249,115,044	16,221,859
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
普通預金	3,251,266	3,249,475	1,791
有価証券	571,839,619	571,757,366	82,253
土地	134,000,000	134,000,000	0
建物	127,578,065	138,098,653	△10,520,588
建物附属設備	1,626,264	1,189,445	436,819
構築物	2	2	0
標本	80,127	78,906	1,221
貴重図書	128	128	0
基本財産合計	838,375,471	848,373,975	△9,998,504
(2) 特定資産			
退職給付引当資産	33,763,570	31,418,706	2,344,864
大規模修繕積立資産	3,467,618	2,466,259	1,001,359
アハウドリ保護支援資金積立資産	32,733,226	27,532,953	5,200,273
特定資産合計	69,964,414	61,417,918	8,546,496
(3) その他固定資産			
土地	352,000,000	352,000,000	0
建物	41,039,791	41,039,791	0
建物減価償却累計額	△31,381,733	△30,678,423	△703,310
建物附属設備	3,053,480	3,053,480	0
建物附属設備減価償却累計額	△1,631,094	△1,425,061	△206,033
車両運搬具	2,956,180	2,956,180	0
車両運搬具減価償却累計額	△2,956,179	△2,956,179	0
什器備品	136,691,109	133,535,069	3,156,040
什器備品減価償却累計額	△123,741,865	△122,126,296	△1,615,569
什器備品（リース）	16,940,000	16,940,000	0
什器備品（リース）減価償却累計額	△10,763,958	△8,646,458	△2,117,500
図書	256,755	395,478	△138,723
ソフトウェア	1,591,953	1,591,953	0
ソフトウェア減価償却累計額	△1,159,557	△983,007	△176,550
長期前払費用	124,498	249,898	△125,400
その他固定資産合計	383,019,380	384,946,425	△1,927,045
固定資産合計	1,291,359,265	1,294,738,318	△3,379,053
資産合計	1,556,696,168	1,543,853,362	12,842,806

科目	当年度	前年度	増減
II 負債の部			
1. 流動負債			
預り金	1,067,208	1,321,286	△ 254,078
補助金預り金	2,750,559	2,849,027	△ 98,468
前受金	597,945	1,193,063	△ 595,118
未払費用	3,658,167	5,429,020	△ 1,770,853
未払消費税等	2,195,500	2,268,100	△ 72,600
未払法人税等	684,500	778,000	△ 93,500
賞与引当金	3,350,593	3,298,021	52,572
流動負債合計	14,304,472	17,136,517	△ 2,832,045
2. 固定負債			
預り敷金	3,952,000	3,160,000	792,000
リース債務	2,310,000	3,102,000	△ 792,000
退職給付引当金	37,107,717	34,795,641	2,312,076
固定負債合計	43,369,717	41,057,641	2,312,076
負債合計	57,674,189	58,194,158	△ 519,969
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産			
寄附金	32,735,226	27,534,953	5,200,273
指定正味財産合計	32,735,226	27,534,953	5,200,273
(うち特定資産への充当額)	32,733,226	27,532,953	5,200,273
2. 一般正味財産	1,466,286,753	1,458,124,251	8,162,502
(うち基本財産への充当額)	838,375,471	848,373,975	△ 9,998,504
(うち特定資産への充当額)	37,231,188	33,884,965	3,346,223
正味財産合計	1,499,021,979	1,485,659,204	13,362,775
負債及び正味財産合計	1,556,696,168	1,543,853,362	12,842,806

IV-2

正味財産増減計算書

令和6年4月1日から令和7年3月31日まで

(単位：円)

科目	当年度	前年度	増減
I 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
【基本財産運用益】	19,921,053	19,921,053	0
基本財産運用益	19,921,053	19,921,053	0
【受取会費】	10,434,000	10,764,000	△330,000
受取会費	10,434,000	10,764,000	△330,000
【受取寄附金】	63,927,690	52,308,370	11,619,320
受取寄附金	63,191,491	52,045,916	11,145,575
指定正味財産からの振替額	736,199	262,454	473,745
【事業収益】	81,977,420	82,659,283	△681,863
受託・請負事業収益	66,777,420	66,020,620	756,800
不動産賃貸事業収益	15,200,000	16,638,663	△1,438,663
【受取補助金等】	81,894,274	77,994,315	3,899,959
受取補助金	58,300,000	56,000,000	2,300,000
受取助成金	23,594,274	21,994,315	1,599,959
【受取利息】	139,405	2,507	136,898
受取利息	139,405	2,507	136,898
【雑収益】	4,473,654	4,645,785	△172,131
有価証券運用益	16,400	16,400	0
雑収益	4,457,254	4,563,639	△106,385
為替差益	0	65,746	△65,746
経常収益計	262,767,496	248,295,313	14,472,183
(2) 経常費用			
【事業費】	244,951,573	239,407,839	5,543,734
役員報酬	1,404,000	1,404,000	0
通勤費（役員）	32,850	36,756	△3,906
人件費 注1	115,480,947	116,469,213	△988,266
業務費 注2	78,991,994	78,045,165	946,829
物品費	18,349,253	13,367,296	4,981,957
修繕積立金	1,900,800	1,900,800	0
支払利息	204,600	204,600	0
減価償却費	16,698,176	16,172,303	525,873
賞与引当金繰入額	3,269,882	3,217,650	52,232
退職金共済掛金	2,655,996	2,642,004	13,992
退職給付引当金繰入額	2,667,392	2,962,376	△294,984
賃貸管理費	1,320,000	1,320,000	0
支払助成金	1,920,367	1,603,560	316,807
支払負担金	55,316	62,116	△6,800
【管理費】	8,773,724	9,256,827	△483,103
役員報酬	156,000	156,000	0

科目	当年度	前年度	増減
通勤費（役員）	3,650	4,084	△ 434
人件費 注1	2,814,718	3,156,288	△ 341,570
業務費 注2	4,015,558	4,114,017	△ 98,459
物品費	357,703	374,142	△ 16,439
減価償却費	1,067,396	1,067,653	△ 257
賞与引当金繰入額	80,711	80,371	340
退職金共済掛金	104,004	117,996	△ 13,992
退職給付引当金繰入額	53,484	65,776	△ 12,292
支払負担金	120,500	120,500	0
経常費用計	253,725,297	248,664,666	5,060,631
評価損益等調整前当期経常増減額	9,042,199	△ 369,353	9,411,552
評価損益等計	0	0	0
当期経常増減額	9,042,199	△ 369,353	9,411,552
2. 経常外増減の部			
（1）経常外収益			
【その他経常外収益】	121,187	3,349	117,838
その他経常外収益（標本）	1,221	3,349	△ 2,128
その他経常外収益	119,966	0	119,966
経常外収益計	121,187	3,349	117,838
（2）経常外費用			
【固定資産除去損】	5	9	△ 4
什器備品除去損	5	9	△ 4
【その他経常外費用】	316,379	255,841	60,538
図書評価損	316,379	255,841	60,538
経常外費用計	316,384	255,850	60,534
当期経常外増減額	△ 195,197	△ 252,501	57,304
税引前当期一般正味財産増減額	8,847,002	△ 621,854	9,468,856
【法人税等】	684,500	778,000	△ 93,500
法人税・住民税及び事業税	684,500	778,000	△ 93,500
当期一般正味財産増減額	8,162,502	△ 1,399,854	9,562,356
一般正味財産期首残高	1,458,124,251	1,459,524,105	△ 1,399,854
一般正味財産期末残高	1,466,286,753	1,458,124,251	8,162,502
II 指定正味財産増減の部			
【受取寄附金】	5,936,472	23,241,552	△ 17,305,080
受取寄附金	5,919,500	23,241,500	△ 17,322,000
受取寄附金利息	16,972	52	16,920
【一般正味財産への振替額】	△ 736,199	△ 262,454	△ 473,745
一般正味財産振替寄附金	△ 736,199	△ 262,454	△ 473,745
当期指定正味財産増減額	5,200,273	22,979,098	△ 17,778,825
指定正味財産期首残高	27,534,953	4,555,855	22,979,098
指定正味財産期末残高	32,735,226	27,534,953	5,200,273
III 正味財産期末残高	1,499,021,979	1,485,659,204	13,362,775

注1：人件費内訳 給与手当、賃金、賞与、法定福利費、福利厚生費

注2：業務費内訳 委託費、旅費、交通費、通信運搬費、修繕費、印刷製本費、光熱水料費、借料及び損料、保険料、諸謝金、租税公課、会議費、交際費、雑費

IV-3

財産目録

令和7年3月31日現在

(単位：円)

貸借対照表科目		金額
(流動資産)		
	現金	2,979,163
	預金	209,615,571
	有価証券	1,000,000
	未収金	49,769,550
	前払金	1,635,139
	前払費用	337,480
流動資産合計		265,336,903
(固定資産)		
基本財産		
	普通預金	3,251,266
	有価証券	571,839,619
	土地	134,000,000
	建物	127,578,065
	建物附属設備	1,626,264
	構築物	2
	標本	80,127
	貴重図書	128
特定資産		
	退職給付引当資産	33,763,570
	大規模修繕積立資産	3,467,618
	アホウドリ保護支援資金積立資産	32,733,226
その他固定資産		
	土地	352,000,000
	建物	41,039,791
	建物減価償却累計額	△ 31,381,733
	建物附属設備	3,053,480
	建物附属設備減価償却累計額	△ 1,631,094
	車両運搬具	2,956,180
	車両運搬具減価償却累計額	△ 2,956,179
	什器備品	136,691,109
	什器備品減価償却累計額	△ 123,741,865
	什器備品（リース）	16,940,000
	什器備品（リース）減価償却累計額	△ 10,763,958
	図書	256,755
	ソフトウェア	1,591,953
	ソフトウェア減価償却累計額	△ 1,159,557
	長期前払費用	124,498
固定資産合計		1,291,359,265
資産合計		1,556,696,168

貸借対照表科目		金額
(流動負債)	預り金	1,067,208
	補助金預り金	2,750,559
	前受金	597,945
	未払費用	3,658,167
	未払消費税等	2,195,500
	未払法人税等	684,500
	賞与引当金	3,350,593
流動負債合計		14,304,472
(固定負債)	預り敷金	3,952,000
	リース債務	2,310,000
	退職給付引当金	37,107,717
固定負債合計		43,369,717
負債合計		57,674,189
正味財産		1,499,021,979

V

資料編

公益財団法人山階鳥類研究所

(令和7年3月31日)



– 66 –

V-2

人員構成

(令和7年3月31日現在)

総裁	秋篠宮文仁	博士（理学）
顧問	島津久永	非常勤
理事長	壬生基博	非常勤、理事
専務理事	林 良博	非常勤、農学博士、理事
研究所長	小川 博	非常勤、博士（畜産学）、理事
研究所副所長	尾崎清明	非常勤、博士（理学）、理事
事務局長	棚橋 伸	常勤

● 研究所（常勤 16名）

鶴見みや古	文化資料ディレクター	専門員
水田 拓	自然誌・保全研究ディレクター	研究員、博士（理学）
浅井芝樹	研究員	博士（理学）
岩見恭子	研究員	
小林さやか	研究員	博士（農学）
齊藤武馬	研究員	博士（理学）
澤 祐介	研究員	
神保理香	文化資料担当	
千田万里子	専門員	
富田直樹	研究員	博士（理学）
仲村 昇	研究員	
平岡 考	参与（専門員）広報	
森本 元	研究員	博士（理学）
山岡容子	広報担当	
山崎剛史	研究員	博士（理学）
油田照秋	研究員	博士（環境科学）

● 事務局（所属員 常勤4名）

棚橋 伸	局長
菅原眞理	主任 庶務担当
谷部百合子	経理担当
高橋敏之	経理担当

(以下、総裁、顧問を除く)

● 人員数：理事長1、専務理事1、所長1、副所長1、所員20 合計24

● 性別：男性16、女性8 合計24

● 博士号人員数：専務理事1、所長1、副所長1、所員8
合計11

V-3

評議員名簿

(令和7年3月31日現在)

現在数9名

	氏名	現職／前職	常勤／非常勤
評議員	徳川齊正	(公財) 徳川ミュージアム理事長	非常勤
〃	鳥井信吾	サントリーホールディングス (株) 代表取締役副会長	〃
〃	柳澤紀夫	(本法人評議員)	〃
〃	赤木 攻	大阪外国語大学名誉教授	〃
〃	小宮輝之	(本法人評議員) (元 恩賜上野動物園園長)	〃
〃	根津公一	(公財) 根津美術館 理事長 館長 (株) 東武百貨店 名誉会長	〃
〃	越智光夫	広島大学長	〃
〃	堀内光一郎	富士急行(株) 代表取締役社長	〃
〃	板東久美子	日本赤十字社常任理事	〃

V-4 役員名簿

（令和7年3月31日現在）

現在数10名

役職名	氏名	現職名	常勤／非常勤
理事長	壬生基博	森ビル（株）特別顧問	非常勤
専務理事	林 良博	（独）国立科学博物館顧問（農学博士）	〃
理事	小川 博	本財団研究所長 東京農業大学名誉教授 博士（畜産学）	〃
〃	尾崎清明	本財団研究所副所長 博士（理学） 社会福祉法人かしわ学園代表理事	〃
〃	黒田玲子	中部大学卓越教授 東京大学名誉教授（理学博士）	〃
〃	進士五十八	福井県政策アドバイザー／里山里海湖研究所所長 東京農業大学名誉教授・元学長（農学博士）	〃
〃	高橋 進	一般財団法人進化生物学研究所 評議員 「生き物文化誌学会」常任理事	〃
〃	中村浩志	中村浩志国際鳥類研究所代表理事 信州大学名誉教授（理学博士）	〃
〃	山田 健	サントリーホールディングス（株） サステナビリティ経営推進本部シニアアドバイザー	〃
〃	吉見俊哉	國學院大学観光まちづくり学部教授	〃

現在数2名

役職名	氏名	現職名	常勤／非常勤
監事	久賀大典	公認会計士	非常勤
〃	北條政利	元本財団事務局長	〃

V-5

特任研究員・特任専門員名簿

(令和7年3月31日現在)

特任研究員（五十音順）

氏名	職名等	研究テーマ
上田恵介	立教大学名誉教授	鳥類の行動生態学・進化生態学に関する研究
上塚浩司	茨城大学農学部食生命科学科 動物保健衛生学研究室教授	野鳥の腸内細菌叢の研究
遠藤秀紀	東京大学総合研究博物館教授	鳥類の運動機能に関する比較機能形態学的研究
佐藤克文	東京大学大気海洋研究所教授	水棲動物の生体力学研究
高木昌興	北海道大学大学院理学研究院 生物科学部門教授	鳥類の行動生態学・系統地理学に関する研究
高田 勝	農業生産法人（有）今帰仁アグー代表	地域固有文化と鳥類の多面的関係の研究
中島 功	東海大学医学部医学科客員教授 星槎大学特任教授	鳥インフルエンザ感染個体のスクリーニングに関する共同研究
中村浩志	中村浩志国際鳥類研究所代表理事 信州大学名誉教授	野生鳥類の生態に関する研究
西海 功	独立行政法人国立科学博物館 動物研究部研究主幹	鳥類の分子系統地理学・DNAバーコーディング事業に関する共同研究
長谷川政美	統計数理研究所名誉教授	鳥類の系統に関する研究
長谷川雅美	東邦大学名誉教授	島嶼における爬虫類の進化と生態
福田勝洋	名古屋大学名誉教授	1. 鳥類羽毛の微細形態データの集積と利用法の検討 2. 鳥類血管系の解析
藤巻裕蔵	帯広畜産大学名誉教授	日本・ロシア産鳥類の鳥相、分類、系統地理学に関する研究
真鍋 真	独立行政法人国立科学博物館 副館長・研究調整役	古生物学に関する研究
綿貫 豊	北海道大学名誉教授	海洋性鳥類の生態研究
吉田成	東京工芸大学名誉教授	写真資料の保存とその史科学的研究

特任専門員（五十音順）

氏名	職名又は前職等	
内山春雄	厚生労働省 卓越技能者 現代の名工 千葉県指定伝統工芸品 楽堂象嵌 我孫子市名誉市民 ほか	バードカービング作成技術の普及及び保全研究・教育への応用
岡村正章	文化放送『朝の小鳥』収録・構成担当	録音・音響関連資料整備についてのアドバイス
北條政利	元（公財）山階鳥類研究所事務局長 （公財）山階鳥類研究所監事	事務局長の経験、ビジネス英語力・交渉力を生かした研究者へのサポート

客員研究員（五十音順）

氏名	職名又は前職等	研究テーマ
蘇 雲山	元（一財）環境文化創造研究所主席研究員	①人とトキが共生できる自然環境・社会環境に関する研究 ②大陸におけるコウノトリ繁殖地・越冬地の情報研究
園部浩一郎	自営	日本の鳥学に係わる鳥類画の調査・整理および研究

フェロー（五十音順）

氏名	職名又は前職等	研究テーマ
岡 奈理子	元（公財）山階鳥類研究所研究員	
黒田清子	玉川大学教育博物館 外来研究員	カワセミの生態行動調査 ゲールド鳥類図譜調査
米田重玄	元（公財）山階鳥類研究所研究員	
佐藤文男	元（公財）山階鳥類研究所研究員	
茂田良光	元（公財）山階鳥類研究所研究員	鳥類の渡り・識別・分類
吉安京子	元（公財）山階鳥類研究所専門員	

山階鳥類研究所 年報

令和6（2024）年度

令和7（2025）年8月31日発行

編集・発行 公益財団法人 山階鳥類研究所

〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115

TEL: 04-7182-1101

FAX: 04-7182-1106

<https://www.yamashina.or.jp/>